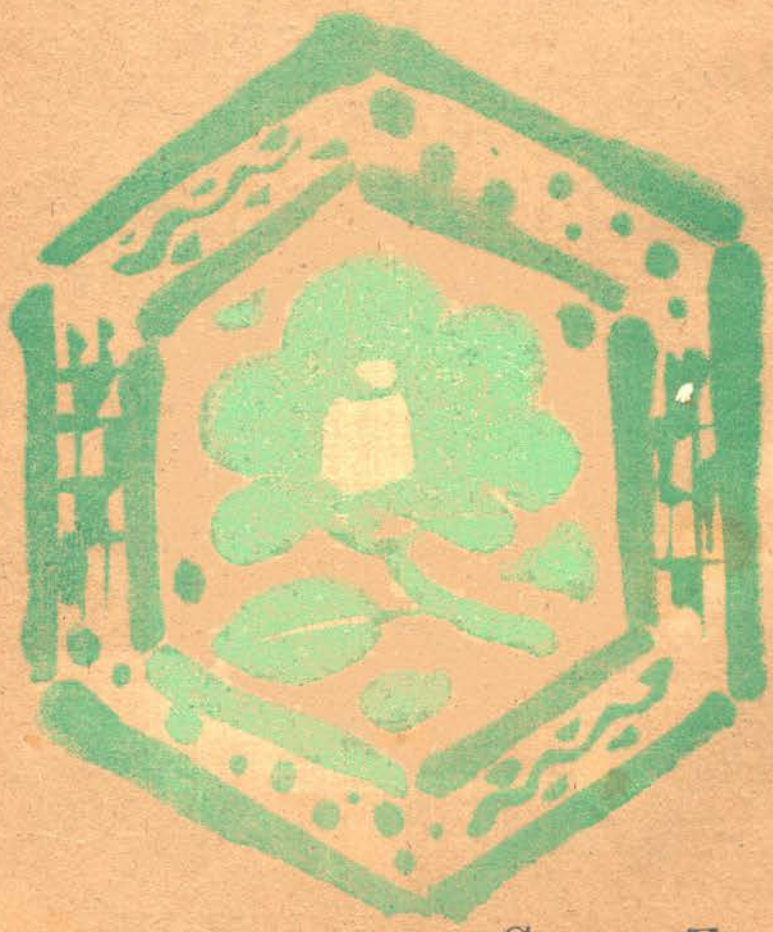
川柳雜誌

麻生路郎★主宰



二●三月號

Senryu Zasshi

No.262

pensoj flugas trans la land-limon

昭和十二年七月一日第三種郵便物認可
昭和十四年三月一日發行第四卷第三號
（毎月一回一日發行）
創刊大正十三年・通卷二百六十二號

續川柳講座（20）

麻生路郎

對照法の句

ここに、

殺人へ多少は僕も亂歩めき　（不二）

と云ふ句があります。この句の面白味は殺人と探偵小說家江戸川亂歩との調和にあります。即ち「亂歩めき」で自分をうまくその事件にからませたところに、怪奇的な感覺を味つてゐるのであります。

結氷のガラス都会の地図に似る　（不二）

この句も、結氷のガラスと都会の地図との類似点による調和の美を詠出してゐるのであります。

斯うして自然的或は人事的材料に感覺的な材料を加味し、しかもよく調和するものを配したならば、その材料のそれ〴〵が独立した場合よりも、句の内容が複雜になつて、よりすぐれた情緒をかもし出すのであります。川柳の多くはこの調和法によつて創られて居るのであります。

ところが、句を構成するのに反対の二物を対立させ、その一つ一つでは感得することの出來ない鮮明さや、雄渾さや、美感を生じさせる手法の存在することであります。そうした手法によつて創られた句を修辞上、対照法の句と呼んで居ります。

前述のやうに句はすべて調和法によつて構成されるものであるとしたなら、反対した二物を対立させて句を構成させると云ふことは一見矛盾した感がありますが、これは調和法の一つの変体なのであります。反対の二物が対立した時にも、ある共通性の助けによつて意外な二物が連結して興趣を喚び起すのであります。

例へば、古句に、

井戸掘は上り家根屋は下りて喚ひ

と云うのがあります。井戸掘と家根屋は全く別個の仕事であります。井戸掘は仕事をするのに地上から、井戸の底に下りるのであり、家根屋は仕事をするのに、地上から家根の上に上るのであつて、全く反対の立場にあります。しかし、いざ畫飯となると、井戸掘は井戸の底から上つて來るし、家根屋は家根の上から下りて來て弁当を共にすることを詠んだのでありますが、この二者の行動が全く反対であるにもかかはらず、二者の間に、共通性が発見されるので、興趣を喚ぼされたのであります。全く反対の物が対立した時にも、斯うした共通性による調和のあることは面白いことだと思ひます。

矢張り古句に、

子無きをば去るに出來ぬをうけいだし

と云うのが、あります。昔、女が縁づいても、七去の訓とかの一つに子無きは去ると云つて、子どもがうまれないと離縁されたものでありますが、一方では子どもの出來ないと云はれてゐる遊里の女を請出して妻とした者がゐるので、この二つの反対の事柄を連結して一句に纏めたのであります。

恋しさは親仁のすねに母のへそ

あまり名吟だとは云へないが、これも古句の対照法の句であります。不孝者の心境を詠んだので「へそ」は臍くりの省略であります。

次に、今人の詠んだ対照法の句を例示することにしませう。

落第は実子首席は継子也　（寒月）

ライオンは眠り孔雀は尾を拡げ　（日東）

降つた町降らない町の東京市　（蘆村）

大石も吉良も同じに名が残り　（三面子）

「落第は」の句は対照句法の寧ちの句であります。幾ら実子でも落第は落第で、世の中はまゝにならぬものです。継母の癇高い声が聞えて來そうで、適確につかんでゐると思ひます。

「ライオンは」の句は動物園の憂を詠んだ写生句だと思ひますが、のんびりした感じも出てゐるし、美しさも感じさせられ性格も、種類もまるで違つてゐるライオンと孔雀との間に、少しの不調和も感じさせないところに、対照法の句として成功してゐると思ひます。

次に、

「降つた町」の句は、材料が至つて單純で、ただ降つた町と降らない町との対照でありますが、それで東京市の廣さを想起させるところが手柄だと云へるでせう。

「大石も」の句は対照句法による詠史川柳であります。大石の名が後世に残るのは判つてゐるが、吉良の名も残ると見たところに、作者は興味を持つたのでありませう。しかも、それは悪名が残つて行くのであります。対立はどこまで行つても対立で、斯うしたところにも、川柳構成上の一手法があるのであります。

要するに対照法の句は、まるで縁も、ゆかりもない反対の材料のどつかに、共通性を発見し、これを連結することによつて情緒をうみ出し一句とする手法に外ならないのであります。が、斯うした手法が絶えず繰返へされる時には、又かと云う感じがして句に対する感激性を殺ぐだらうと思ひます。いくらうまいからと云つて毎日牛肉ばかり続いては飽々すると云うのと同じだと思ひます。

詠史川柳に就て

詠史川柳と云うのは

仲麿の相談相手月ばかり　（古句）

のやうに、歴史上の人物や事蹟を詠んだ句のことであります。その取材は史実から採つたにしても、作者の戯作的な手腕によつて、揶揄したり、

男女両性に作用する
プレホルモン
錠剤・注射・皮下
塩野義製薬

皮肉つたりして史実からは全く歪曲された形のものが多いのであります。

殊に傳説や物語から詠んだ句まで、詠史川柳中に包含してゐるのであります。一例を挙げますと、

内藏之助くしやみをしても
医者に見せ　（古句）

と云う風に、赤穂義士の大石内藏之助を詠んだ句があると同時に、

かな手本いの字は京にわび
住居　（古句）

のやうに假名手本忠臣藏の大星由良之助を詠んだ句もあるのであります。

詠史とは云うものの、古川柳では兎に角面白お可笑しく詠みさへすればよかつたので、句の價値から云へば全く第二義的な作品が多かつたのであります。それが明治末葉になりましても詠史川柳に対する作句態度は大して変つて居りません。井上劍花坊や小島六厘坊などが盛んに作つたものです。

例へば、

能登守鶏ほどは飛上り
　（六厘坊）

や

十四日までは大石笑はれる
　（劍花坊）

と云つた風の句を詠んでゐたのであります。なるほど「鶏ほどは飛上り」の形容の巧みさは認められますが、單に面白く詠んであると云うだけの句であり、「十四日までは」の句は十四日がヤマでありますが、知的に溺れすぎた点が欠点だと云へるのであります。

その点から云へば嵯峨野に於ける仲國を詠んだ句に、

横笛は鼻打拂ひ打拂ひ
　（六厘坊）

と云うのがありますが、これなどはまだ佳吟の部に属すると云つていゝでせう。

大正になつて詠史川柳は殆んど顧みられなくなつてゐましたが、昭和十五年が日本の建國二千六百年に相当すると云うので、「川柳雜誌」誌上に、戸田孤篷氏の詠史川柳が掲載され、続いて「昭和川柳」誌上にも堀口塊人氏によつて詠史川柳が発表されたのであります。両氏の作品はその態度に於きましては從來のものに比して遙かに眞摯なものを見うけましたが、それと反対に詠史川柳としての興趣を喚起する力は薄かつたやうであります。その後詠史川柳は全く影を沒した観がありますす。

では、詠史川柳と云うものは詠むに足りないものかと申しますと、必ずしもそうではないと思ひます。史実を藉りて当時の風俗や人情を詠んだ句には又それとしての味があるのでありますが、要は表現力の巧拙如何にあるのではないでせうか。それ等の作品の構成にあたつて、作者が作中の人物になりきつて、その心境を詠出するところまで行けば意外に面白い句が得られないものでもなからうと思ひます。從來の詠史川柳の多くが第二義的な作品として排せられたのは、そこにそれだけの理由があつたのであります。從來の詠史川柳はあまりにも、ふざけ過ぎ、歴史中の人物の人格を無視したり汚損したりしてゐると思ひます。

前述のやうに、新らしい視角から再出発したならば詠史川柳にも又新境地が見出せるのではないでせうか。

やぶそつて

沢田四郎作

シベリヤの曠野を横ぎつて八年ぶりに見た懐しの我が家に帰つて來た自分の一番鮮かな印象は、目に泌む様な庭の苔の青さであつた。至つて小さな庭ではあるが、いろ〳〵の草や木が見られる。一日、岸和田の七中の校長の鈴木君が訪ねてくれたので、植物学者の同君に、庭の草木の学名をたずねて見る。同君微笑を浮べてなか〳〵言つてはくれぬ。せつかちな自分はいらいらして即答を促すと、薄い髪の頭を掻き上げながら、如何にも氣の毒そうに、これがヤブコージ、あれがヤブイバラ、これがヤブソテツ、岩の根もとのがヤブラン、燈籠のかげのがヤブノゲですといふ。何んとおそろしくヤブの名がくつついてゐる。おまけに笹竹がおそろしく繁殖してゐて、まるで竹藪の様である。さては住む主人が藪医ときてゐるので、鈴木がすぐ答へてくれなかつた心中も察せられて、自ら微苦笑させられた。同君退去のあとで、なぜに又ヤブの名のつくものばかりを集めたのかと、息子にいぶかると、息子も笑ひ出してわし達が植ゑたのではありませんと大いに弁解につとめる。よく聞くと、これは私の不在中貸してあつた「やまさか餅」といふ餅屋の主人が植ゑたのだといふのである。この人は大阪の町で大きな餅屋をしてゐたそうであるが、空襲がこわくて吉野山の頂上に疎開してゐたが飛行機が頭上を通るので、又、伊賀あたりへ疎開したそうであるが、空襲では無事であつたが、病氣で亡くなつたそうである。いろ〳〵植物が好きで、しきりにこうした植物を植えてくれたらしい。わけて竹は好適地と見えてすばらしく繁殖し、この頃は地の底をくぐつて玄関の傍に四、五本も首をもたげて來てゐる。餅屋の主人には生前会つた事はないが、空洞になつた心の中に一つのユーモーアを與へてくれたこの人に、私は一種の懐しさを覚える。

十八年まへ東京を引き上げて、この地に竹庵業を開業した折に、私の前途を祝福して、わざ〳〵短冊に「三七やはやらぬ医者の門の内」といふ読人不知の俳句を書いてくれた友人の事も思ひ出される。当時これを読んで非常に氣にした老父も今年七十九才で元氣で先日もやつて來られたが、三七は申すまでもなくさんしちさうの事で、秋の頃深黄色の花をつけるきく科に属する雜草の名である。

あの頃は、藪や草の名まで多少は氣にして、庭の雀をもおつ拂つたものだつたが、人間も五十を過ぎると、こうした植物の名にさへ一入の親しみを覚える様になるらしいのである。（一月二八日）

筆者は醫學博士民俗學研究家

堺市　中島生々庵

血を吸うた様なルーヂュで借りに來る
桃割れにしては勇敢な裾さばき
初日の出イミテーションを蹴散らさん
立候補どれが火のつくマッチやら

次男洗礼をうける

たくましく心の聖火まもり抜け

大阪市　武部香林

元旦の雨うらめしゝ凡夫なるか
三ケ日歩きたくなる懐手
大臣のボロさ勞働運動史
金出して見給え米は流るゝよ

兵庫縣　戸倉普天

一人旅つゝましけれど仲居なり
遠足が雀の様に乘つて來る

奈良縣　上田翠光

年寄の意見素直に聞ける歳
珠數の珠かぞへてゐたり寺の隅

勅題に題す

足跡のないのがうれし朝の雪
通勤の車内へ解ける朝の雪

横浜市　福田山雨楼

政治とは何宝盗賣ることか
スクラップブックが僕の遺産だよ

冬來りなば春遠からじ独り咳く
ネギゴボーニンジンいけてデセンバー
サンダルで冬の素足は寂しいね
養老院ララの外套スマートね
貨車のネギほのぼのとした暖か味

布哇　高沢一浪

母親に相続さして添とげる
晝あつて白粉やける呆れたり
女からうつかり腕をからまれた
對々に遊んで爭議ない家庭
團栗の八千萬に呆れたり

池田市　戸田古方

錢湯へパイプとライターだけはもち
チョンがれをするに講堂明るすぎ

布哇　内藤草一郎

名門の兒と云ふ丈けで副社長
バイヤーの土産パン〳〵物語り
紙幣を読みつかれた指へシガレット
ぐつすりと寢て見たいよな十二月
棺桶が八百弗では死ねもせず
朝のバス女のあくび変に取れ
飽きもせでマドロスパイプ水と空

尼崎市　水谷鮎美

ヨイトマケなどおもひだす十二月
温もつた炉燵治兵衛をおもひ出し

猪野秀義君の英霊還る

英霊へ霙となつた師走の日

不朽洞山房徹夜句会參席（五句）

御不淨へゆく提灯の芝居めき
極楽の燈か内陣はひつそりと
句に生きるしばし欄間の佛達
師の姿勢正しく曉の筆となり

寄せ書の顔へほのぼの明けてくる

京の頒見世規劇

「茨　木」

叔母實は悪鬼と変じ風と逃げ

「熊谷陣屋」

鐘哀し諸行無情の陣屋也
鎧櫃ちと彌陀六は氣が強し

「夕霧伊左衛門」

おゝしんきくさやの伊左は炬燵にゐ

兵庫縣　大阪形水

煮〆するその事樂し台所
着付して踊り子サット膝を割り
子を連れて街頭写眞申込む

大阪市　福田妄夢

犬でさえ家があるのに犬でさえ
うつくしき脚へポカンと口をあけ

奈良縣　西垣錦風

ついうそを言つてしまつた十二月
八百屋から炭が有るよと知らせに來
顔に炭つけて亭主の大晦日

岡山縣　浜田久米雄

一ばいの口で口紅なにか喰ひ
一萬圓を越した給料日のあわれ
柏子木の音に泥棒向きをかえ
わが党はわが党はラジオ切つちまへ
コップ酒云ひたいことのありあまり
冷汗に出すハンカチもよごれきり
子の顔が浮かんで消えたにぎりずし
頬冠り村長さんへ一寸ぬぎ
頬冠り同志近寄る煙草の火
置炬燵金づまりした顔になり

平塚市　木村孤浪

トンネルをすぎて話をきゝ返へし

宮様の帯をねらうカメラマン
スピーカー故障で口がパク〳〵し
正札へ息でガラスのくもる程
開けさせたまんま歯医者は一服し
雑巾も持つと女優に箔をつけ

布施市　永田里十九

家計簿をひろげ父親飲んで居る
袖の着物まあ來年だ來年だ
寢るだけでよいのに家のみつからず
三べんの乘替ですら疲れて居

大阪市　石浦柳水

桃割れの鼻はアグラで十五貫
そりやそうだ然し一票俺のもの
熱と意氣ほんにお前は鍛治屋の育ち

大阪市　市場沒食子

痞立てゝ辞めて守衛に成り下り
眼帶をしてゝも映画やめられず
儲けたで博士学士を顧問にし
友達がまだ居て呉れる枕もと
妻にさへ禿げた頭を指さゝれ
貧にして尙且つ子にも先達れ
只一つ酒が生きよと尻を押す
忘れたい顔に毎日つき当り
忠実にやればやり過ぎとも云われ
若鮎と云はれし過去のあつた彼

名古屋市　吉田水車

空の旅の思ひ出（八句）

万一の時の托生十二人
ニュートンの原理に抗しつゝ進み
手をふつてみても甲斐なし天と地と
説明にいとも忙はしきエヤーガール
呑みそうな雲は案外無抵抗
爆音へエヤーガールの顔ばかり
エヤーガール今は恋しきもののうち
着陸の姿勢へ山が浮いて來る
ユネスコてなんやと母の老眼鏡
背水の陣妻はミシンを習い初め
議場では總理大臣吉田君
臆病と言ふは大家ののぞき窓

大阪市　須崎豆秋

みの蟲のなんぼ匐うても壁だつた
煉炭に子規の表紙がそりかへり
お元旦オヤ〳〵ライタに石がない

ふるさとで正月（三句）

ふるさとの雑煮の味へとろりとし
ありがたき元旦母が七十九
そのかみの玉奴さんお婆さん

帰阪（二句）

船の窓もうふるさとの影もなし
船の中母上さまの握めし

兵庫縣　竹内潮花

見送つて泣きたくなつた霧に立ち
愛情の價ぶみされてるのが口惜し
何度目の恋か女のしら〳〵し
丸髷を結ふても二尺五、六寸
泣けるだけ君を泣かせる部屋もなし
雪の夜に逢へばどこやら映画めき

奈良縣　尾崎方正

よく喋りよく笑ひ三十の娘でゐ
患者から手術をせよの注射だの
今にして思へば妻は苦労性

姫路市　夷一笑

風の音春遠からず遠からず
いて土につまづくほどの酒のよい

紅多呂を偲ぶ

道草を喰つてるのだと思ひしに
見拔かれて僞経済の苦笑ひ
地下鉄の孤兒へ氣になる冬支度
長女もう大人としての煙草受く
飲みたさを素通りさすも子沢山
献立へ今宵幹事の労をくみ

兵庫縣　德永雅美

むつゝりを知りつゝ賴む腕のよさ
薪まで積んでお嫁の荷が屆き
カサ〳〵と吹寄せられた十二月

大阪市　木下幽王

戰はまだあるほら君の心にも
へりくつを十ほど竝べ醉つぶれ
青春をのんべんだらりと唄ふなり
ゼスチュアも胸へ手を置く齡となり
かゝる人ありしと墓標に刻まんか
いちや〳〵と幼稚な恋につばきせむ
女房も声をあわせて値切るなり

鳥取市　中島鉄洲

空俵氷雨にまかす哀れなり
舌二枚でもたらぬ世の中
同権の上に女房の稼高

出雲市　尼綠之助

松の内うれしいことにして歩き
お降りや相合傘の景になり

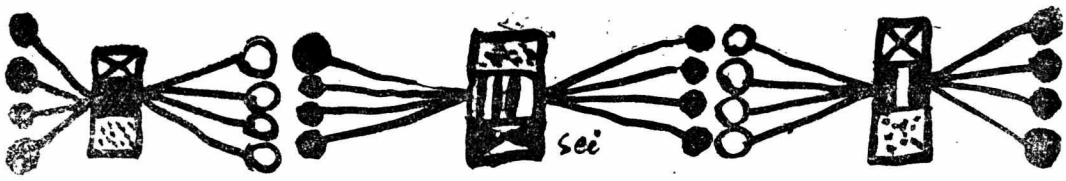
選挙風景

候補者のやつばり勝手なことを云ふ

大阪市　水谷竹莊

ビースには事をかゝない二号なの
へそくりの百円札はしわだらけ
情実に負けず薄情者にされ
責任へどうのかうのと官吏なり
落ちぶれてしまへば氣樂と思えども

大牟田市　高田抱逸



十二月まどろむ夢は金のこと
外聞をたもつやりくり苦労する　大阪市　稲葉鳩花

君したふ想ひへいつか夜もふけて
ママとなる体だ君よいたはらむ　下関市　國弘半休

身投げなど出來そうもない癖をする
帰省する度に牛の胃羨やまし　入代市　佐野卜占

子を叱り嫁を叱つて平和なり
自制なき怒にもゆる日もありて
給料の遅拂何とさもしい言葉なる　兵庫縣　小沢史葉

溜涙何にも云はず足袋をはき
ぬり立てた顔が寂しい佛の日
子の日記叱つた事が書いてある
パン〳〵と間違へられた婦人記者

エキストラ思はづ秋へ立ち止り
先輩も疑獄の一人今朝の記事
事務の隅議論は男が敗けた様
婦人部の長で二十を出ぬ若さ
議事堂は野次計りなり雪模様　神戸市　大鶴喜由

曼珠沙華の如と咲く日を祈る未亡人
映画から受ける感化を父案じ
風呂を出て羽化登仙にある寢椅子　大阪市　吉田斜水

鉄筆を摑いて停電一服し
ラジオ又向三軒両隣り
子が出來てカメラが慾しいなと思ひ　新居浜市　在間小楼

奥様と奥様非賣品に立ち
酒飲みと言ふなかれ多額納税者
餅一ッつけず我子を叱りつけ
四苦八苦の杵の音とは子は知らず　尼崎市　早川聽松

氣が付けば銀婚式はとうに過ぎ
長生きを神に祈つた頃もあり
魚でさへ餌にたやすくは來ぬものを
進物に米がなるとは世も替り　岡山縣　山分北路

我が道を行くで官吏を四十年
明日へ亦溜息が出る年の暮　愛媛縣　月原宵明

大根なら貰へる程の嫁の里
出納課せめてこれ程あればよし
冬の雨もう子に穿かすものがなし
電髪の見本の如く乙女ゆく　下松市　山根白星

恋

沈默をとがめばうれしきためといふ
舟世帯級長の子を送り出し
身の程を知れと声なき声すなり
欠伸から心変りの君と知る
闇市を覗き資本家じみた僕
レントゲン法廷に立つこゝろもち
咳すぐに風に散つてく船大工
男飲めばなに女房は離縁する　愛知縣　鈴木みきを

一家して撮るアルバムに牛も入れ
適齢期すぎて淋しい松の内　滋賀縣　藤田わたる

湯の街へつれてく女指細し
鼻声と涙で女年を取り
新興とやらに大観泣くならん
未亡人あやしき程に化粧する　名古屋市　山林正思

一人居てネズミ如きにおどかされ
私など撮るスナップが氣の毒な
話し好き主人の愚痴もやりくりも
アルバムへロマンティックな顔をよせ
お星様おとぎ話に似た光り　大阪市　麻生梨里

○

五十九歳を送る　兵庫縣　島山一歩

大空に五十九歳の弓を射た
あなうれし今年は虫を殺さざりき
君よ君女代議士とは酒飲むな　金澤市　安川久留美

冬の部屋蚊帳の釣手も思ひ出に
やみさうでない雪夏の傘も行く
きちがいの型にはめられ飯をくい
炊事場に盛りのいゝのは焦げている
きちがいの胸えヌラリと聽診器
きちがいの長所え作業さづけられ　大阪市　麻生葭乃

母は來すたのんだ梅の壺も來す
墓口も襟も子供の拂ひ下げ
ガス出てる間にと要らない物もたき
漏るとこもあろが屋根ある有難さ
茅屋をお靜かですと賞められた
地下鉄へ出よとしたのに地下賣場　大阪市　橋本綠雨

奥田水月氏長女結婚
正月を楽しむ様に嫁にやり
福島正則氏長男出産
赤ン坊にあかりをみせる父の顔
チップのお礼に四五人膝まづき

九州川柳行脚

麻生路郎

顏山陽先生外史著述宅趾にピカドンの戰禍を回想する路郎主幹（廣島にて）

（承前）▼十日の朝、まだ仄暗い中に卜占君が迎ひに來てくれたので、例の自轉車の尻で卜占居に帰り、いそいで朝の食卓についたが、少し腹の調子がゆるんでゐるので、奥さんの心づくしの餅も僅しかのどを通らなかつた。

滯在中はまるで親が來たやうに、みんなで歓待して頂いたことをしみ〴〵有難く思つた。いよいよ今日はお別れである。お土産までいただいて、大急ぎでトランクの荷を纏めて辞去した。再び卜占君の自轉車の尻で駅へ出た。魚屋、夏生、伊太吉、銀風、卜占の諸氏に見送られて八代にアデューした。いろ〳〵お世話になつた田中教授とは熊本まで同車した。▼汽車が大牟田駅へ着くと、高田抱逸君が改札に姿を見せられた。八年前に、大牟田支部で歓迎句会をして貰つた駅前の旅館は戰災であとかたもなかつた。瓦町の抱逸居で晝食をいただいて三池染料へ案内された。製品のサンプル室を見学、屋上から大牟田市の全貌に接した。工場都市は見渡す限り惨たるものであつたが、俯瞰する工場街はすべて三池染料だつた。夕刻から同社の大講堂で川柳に関する講演をした。更に席を日本室に移し一同作句に耽つた。はる〴〵と來て、斯うした熱心な作句ぶりを見せられてうれしく思つた。こゝへ下関から國弘牛休君が、下関での講演打合せのために來訪、同君も作句の席につらなつた。▼散会後、三輪文化部長や松村課長等に、自動車で旅館「なぐさ」に送られ歓待を受けた。その夜は抱逸君と枕をならべた。▼十一日の朝、抱逸君に駅まで見送られて日田市に向つた。▼トンネルを幾つか抜けて十六時頃、大分縣の日田市に着いた。某人、京司兩氏に出迎えられ川沿ひの宿に入つた。両氏の案内で水郷日田の風光に接した。宿に戻つたら、秋のとりいれで、出迎えが出來なかつたと云つて、自称駄農の廣瀬恒太氏が姿を見せた。続いて市の教学課長等が見えて晩餐を共にした。夜は日田市主催の公民講座で、川柳に就て語り、会を閉ぢてから、聖賢廣瀬翁の遺された塾と図書館に案内せられた。そしてそのことごとくが名望廣瀬家の産である恒太君の純情を裏づけるものだつた。宿に帰つた。腹の調子はます〳〵ゆるむばかりだ。湯に入れてもらつたが、からだは少しもあたたまらない。日田は実に寒いところだつた。▼十二日の朝、恒太、京司の両氏に見送られて発つた。某人君は恒太君の要望で、私のトランクを持つて博多まで見送つて呉れることになつた。腹のゆるんでゐる私にとつて助かつたことは云うまでもなかつた。▼十一時に博多に着いた。大神梨雨江氏の出迎をうけ、竹若町の眞珠洞居に案内され、午後、天神町で催された歓迎句会に出席した。参会者は廿名ばかり、私は選と講演をした。熱心に聴いて貰へたことはうれしかつた。佐賀の蘇雨子氏等も來会されてゐた。川路氏は忙しい中から姿を見せられた。眞珠洞氏から、大阪あたりの句とどうですかと云ふ質問も出た。▼夜は眞珠洞居で、博多名物の水だきをつつきながらの座談会が開催された。私は私の娘夫妻が訪れて來たので三十分ばかり中座した。今回の博多柳人との集ひについては梨雨江氏に負ふところが多かつた。▼その夜は眞珠洞氏の好意に甘へ、お世話になつた。▼十三日の朝、多忙な眞珠洞氏の見送りをうけて、某人君と共に驛に出た。某人君は不水に会ひたいからと共に下関に向つた。娘夫妻が見送りに來た。▼列車が門司港につくと、九呂平、不川の両氏が出迎えられ、連絡船で下関に渡つて牛休君に会つた。▼晝食後、驛の講堂で鉄道職員並びに下関の柳人のために牛活と川柳に関する講演をした。講演後席を桟橋食堂に移し、藤井米三氏等と共に作句をしながら会食、こゝでは市多楼君の未亡人にも会つたし、不水君にも会つた。万事牛休君に厄介をかけた。十九時ごろ鹿児島発の急行で一同に見送られて帰阪の途についた。▼長々と書きつづけたが、これは私のホンの覚書に過ぎない。心と心の結びつきや、いろ〳〵とお世話になつたよろこびは、いつまでも、私の胸の奥深く畳みこんでおきたい。（終）

川柳コンクール

…廣島に於て開催…

廣鉄局の機関誌「ひろしま」の編輯部から川柳コンクールの選者として招かれ十二月二日（昭和廿三年）早朝の急行で発つた。岡山から渓田久米雄君が乗車同伴、廣島へ着くと直ちに廣鉄の職員会館へ案内され松の間へ落ちついた。

三日の朝、福岡葉留路君の案内でピカドンの戰禍の跡を見せて貰うことになつた。久米雄、不朽、葉留路の諸君と私の四人を乗せた自動車が一時間余り、廣島市の街路を走つて、つぶさに戰禍の跡を見せてもらつた。そして自動車が元の廣島驛に戻つた時には大きな溜息を吐いた。

サロンのやうな廣々とした駅長室に入る。正面には學堂翁の扁額が懸つてゐた。横の丸額に、昨日揮毫したばかりの拙筆の短冊が二葉收められてゐる。私は廣島の玄関番ですと云はれる田辺駅長としばらく談笑し、お茶をよばれ、雅帖を汚して辞去した。

午後三時に、職員会館階上の一室で、いよ〳〵川柳コンクールの幕が切つて落された。参加局部は廣島鉄道局、廣島管理部、岡山管理部、下関管理部の一局三管理部参加選手は一局三管理部の予選をパスした粒選り選手各五名、計廿名がズラリと目白押に、押し並び、今日を晴れと張り切つてゐる。それを取り巻く補欠選手や各部局の應援者で会場は寸隙もない。

嬢て主催者の挨拶があり、選者の出題によつてコンクールは直ちに開始された。各選手は眉宇に必勝を期して創作に没入した。締切の時間が來ると一斉に句箋を膝の前に置いた。選者が選をしてゐる間に、出席全員参加の席題が課された。私の講演があり、席題吟の披講があり、最後にコンクールの発表があつた。岡山管理部が断然優勝し、その殊勲者は渓田久米雄氏で一等賞をかち得た。久米雄氏の一等賞には誰も異論がなかつたが、出張や支障で予選に参加出來なかつた腕に覚えのある地元川柳人が参加出來なかつたことを残念がつてゐた。地元の入賞者中に紅一点の女流作者がゐたことはせめてもの慰めだつたかも知れない。

一同会食して散会。最後に地域的ではあつたが柳界最初の川柳コンクールがこゝに誕生し、而も大成功裡に終了したことを企劃者好本氏に感謝して筆を擱く。（路）

柳樽の女流作家〔下〕

冨士野鞍馬

九十一編に　佃選で
相傘の礼云ひのこす稲光り　エイ
九十三編に　佃等の選で
須磨の雷これは〳〵と光る君　エイ
二百十日に金比羅へゆくたわけ　同
さゝ浪や志賀なく勢田の蜆堀り　同
霜ふりの雪駄浮雲薄氷り　同
山ばかり案じて暮す庭造り　同

九十五編文政九年正月二十四日江戸浮世小路百川楼で開かれた、天川屋儀平百回忌追善会にこれも「忠臣蔵」の題で川柳松石居の選
茅野のはらは忠孝の道二つ　その女
鳩ゆゑに孝子たゆとふ義の門出　同

九十六編文政八年十二月二十日葛飾納会に胡蝶選大尾に
すかしたか燕る大將匂ふ宮　エイ

九十九編文政九年八月二十八日向島建碑の四世川柳末廣大会に山猿選で
はさめ〳〵と知盛は下知をなし　その女
おだやかさ年に七十二度吹き　西女

百一編に文政九年二月二十日武蔵野会に佃、迎藤山笑の選で
ひまを願つてあつくするゆや御前　エイ
日屋あらぬ春の遊びの首ッ引　同
場所柄と貳春筋の通り町　同
浅草にかこれてゐる御膳海苔　同
白菊をおきまどはせる稚兒が淵　同
文字の起りは蒼頡と小松川　同

百四編に文政十年五月二十八日と八月二十二日の櫻木月並会で風松、柳泉選
ひれづくでこいといさみの飛の魚　エイ
ヲヤ〳〵ほんにれへマアウーン遠眼鏡　同
すきこそ物の上手なれ曲とり　同
地獄の庭を覗いてる木蓮花　同
戸立ての門に虚無僧手をつくし　同
身をのがれんと前へ引めいた犬　同

百六編に文政十年四月二十三日一峩、杜蝶追福の會に川柳松鱸、風松、英雅、白水の選に
石碑にも墨のついてる義の手本　その女
身が寄つて骨を集める鳥部山　同
會者定離廓へ響く寺の鐘　同
三羽でも一羽でも鴛鴦あわれなり　同
幽霊うかむと草双紙仕舞なり　同
御持佛へ足で煮た茶を鍛冶屋あげ　同
口よせにさしもに猛き遣手泣き　同
じたらくな廓補陀落のうしろなり　同

その女の句はこれでお仕舞になつてゐる。それでも五年間句を見せてゐた。
この百六編に柳樽中唯一の女流選者としてお榮さんが選評をしてゐることは特筆すべきことで、文政九年四月二十四日の葛飾の句會に、川柳、佃、清冀、木賀光頂、風松、株木、目佛等一流選者の集りで選評を發表してゐる。その選評振は本格で堂々たるものであつた。この会には父北齋も出席してゐたがお榮さんの句は見えない。

百七編に文政九年十二月五日風松主催の會で、七代目團十郎、柳亭種彦、川柳外歴々の出席「芝居」「賣色」の題で、
八朔の雪仕立屋で積つてる　エイ
顔見世の留守居は下女の役不足　同
恐れかんしん股抜きの傘の立て　同
雨もりのさわぎ舞台に穴があき　同
端役の代り筋棒でくらはせる　同
段切りにキックりきめる伍子胥が眼　同

百九編に文政十一年正月二十八日と二月二十八日の風松主催の會に川柳、風松等の選で
朝鮮も蛇の目の傘でおつぺしより　エイ
四海は皆兄弟とかげま云ひ　同
石竜子天上と小人島年代記　同
月に七日は休日熊野御前　同

百十二編に川柳選
藏の内うなるをいせ屋聞て笑み　金女

百十五編に文政十年十二月七日の集馬追善會と十三年三月六日淺草の會の何れも柳亭種彦選で
初心な佛藤色の雲にのり　エイ
曲物へ春を詰め込む櫻濱　同
櫻濱花の床几に過去未來　同

百十六編に文政十一年正月十二日と四月二十二日の小船會に柳亭等の選
鞠の骸骨まはしてる天文者　エイ
親に弓引く鐵砲直をつける　同
死相を悟り雪隱へわらを入れ　同
我朝の武將の虎の威も高し　同

これでお榮さんの句は終つてゐる。北齋より早く作句を始

アメリカ式駆虫薬
十二指腸虫
蛔虫
屋内寄生虫
アメリカ薬局方・四塩化エチレン
コメット
テトレン球
東京　大阪
株式会社
國國製

め永年佳句を見せてくれたが、天保に入つて父と共に前句界から遠ざかつた。蓋し柳樽中女流第一であろう。百十七編文政十三年四月廿八日中住追福の會に川柳選

名殘おし淨土をさして行くも　秀花女
春

これは中住の緣者らしくこの會だけに顏を出した女性であろう。

百二十二編に天保三年十一月十二日の佃主催で成田不動獻額大會、この時の集句三万、入選四千三百といふ盛會、川柳選の高點句に

二三年縫込んで置く母の欲　雪女

雪女は和歌堀連の女流として名を知られ、天保五年版「川柳百人一首」にもこの句が登載されて居り、相當佳句もあるであろうが、柳樽にはこの一句だけで、女流の句の中での佳句である。

百三十二編に秋葉山奉納狂句合佃選に

ぶく〳〵とくるしんでゐる　虎女
はなし亀

紺屋の子持仕立屋が乳を　同
つける

百四十五編に天保七年三回に亘る佃主催の會に、川柳、株木、草花、花山の選で

星一つ六万石の御大祿　虎女

裏白を草摺にする具足餅　同

一家中目へ指をさしこれが業　山花女
遣り手衆に似たと火鉢の足へ　同
指

乳母斗り小唄で越える年の関　同

百四十九編に天保八年六月二十日御田八幡奉額句會赤子選

直しても煙管に殘る廓の癖　よし子

百五十編に天保九年二月二十八日眞砂連三箱主催の水滸傳會に川柳其他の選で

翁屋の菓子芭蕉忌へ遣ひ物　よし子

神事能番組翁弓八幡　同

近くゆく麥はもたぬ帆かけ船　同

重き身も輕部が玉に運の　同
つき

揚弓の定木につかふ鼻柱　同

山伏の天狗に逢はぬかのへ申　同

この「山伏」の句は川柳選大尾の句で、よし子さん仲々味なところを見せてゐる。又虎女の「星一つ」は後學が暗誦する句でこの人も健吟である。山花女も相當であり、この三人はこの後も句作を續けたであろうが、この年に柳樽は百六十七編で終つてゐる。

以上十六人の女流作家を發見したのであるが、どの人も女の當然とでもいふ永續性がなかつたようである。もつとも男でも永續してゐた人は少いのではあるが。江戸女性の卑屈な空氣の中で、開放的に前句狂句界に活躍した前述の女流作家は、何れも世馴れた何程か書物も讀み能筆の人であつたと考へられる。外に柳樽に登錄されてゐない女性作家も相當にあつたようで、天保の「川柳百人一首」に雪女の外に一葉といふ女性もある。又無記名の句の中に女性の作があるかも知れないし、見落しもあるかも知れない。お榮さんの外の人の素性が知れないのは殘念であるが、尙心掛けて怠らず研究したいと思つてゐる。

現代女性は江戸時代と比べものにならぬ開放的になつてゐるのであるから、もつともつと女流の健吟家が殖えてもいゝのであろう。

良優質品

ペン先
針ピン
セムクリツプ

立川ペン先株式會社

上野市

不朽洞會から

▼古川麗花麗氏（ハワイ）川雜ハワイ支部のウイロ社が一月六日に新年句會を開催、その句報を寄せられた、みな元氣だとのこと▼尼綠之助氏（出雲市）は一月十五日に出雲支部の句會を開催されたところが猛烈な吹雪で僅に六名、それでも愉快な集りで段々よくなる氣配なのでよろこんでゐるとのこと▼高沢一浪氏（ハワイ）は老嬢ます〳〵元氣で柳界淨化座談會記事を讀んで、A氏は誰れ、B氏は誰れと適確な名指しをされるなど、川柳に対する熱意を示されてゐる。「此の度の飛行便は壱百六四の切手貼付で恐入ります、甚だ御氣の毒に堪えません」などとも書かれてある▼種瓜平氏（大阪府）は總選挙に際しアベノ橋や其他の街頭で棄権防止の即席漫画を描いて人氣を博された▼安川久留美氏（金沢）は師走の二十四日に退院された▼弘津柳慶氏（廣島縣）は一月十三日、竹原町の松井可笑氏の宅で、川雜竹原支部復活句會を開催されたとのこと、今後の発展を祈る▼宮田不二氏（旭川）は北海道へ帰られてからもう四年になるそうであるが、何年經つても寒さに慣れそうもないので四月には内地へ轉出を決行されるとのことだ。句會で又々會へる日を待つてゐる▼石浦西花園氏（大阪）が柳水と改号して復活された▼水下幽王氏（大阪）は月曜は病院通ひ其他は自宅安靜とのこと▼上田翠光氏の祖父が一月十七日に奈良縣宇陀郡三本松村宇向淵の自宅で亡くなられました謹んで悼む▼市場沒食子氏（大阪）は二月廿日頃博多熊本方面へ公用で出張されるとのこと▼高田抱逸氏（大牟田市）は一月三十日に熊本の肥後文化主催の川柳會へ出席され八代から出席の佐野卜占氏、遠山夏生氏等と路郎先生を話題の中心として柳談を交はされたとのこと▼竹内潮花氏は神戸市垂水区岩岡町岩岡農業協同組合内竹内甚之助方へ移轉された▼村田流水氏（ハワイ）は四月上旬頃來日される由▼上田翠光氏（奈良縣）は一月三十日（舊正月二日）に路郎主幹と一歩氏を迎え歓談された▼早川聽松氏（尼崎市）は家事の都合上、舊冬十二月限で退會された。

新会員紹介

二月

山林正思氏（名古屋市）正　水車氏紹介
石浦柳水氏（大阪市）維　路郎主幹紹介
阿方万的氏（西宮市）正　以上水客氏紹介
間島青丹子氏（京都府）正
村田流水氏（ハワイ）維
小田沙兆氏（ハワイ）維
以上麗花麗氏紹介
上田春柳氏（大阪市）正　鮎美氏紹介

高級化粧料容器には斷然！
ヤマギンの……
黒硝子
大阪市南大学前郵便局
西第一ブロック
山銀株式會社
電話淀川四四七番

近作柳樽

本妻の危篤二号を慌てさせ　岡山縣七面山
脱税へ二号の兄の智恵も借り　同
マルクスもデモクラシーもパン呉れや　同
人が來て電話の声の艶を消し　同
儲けてる方が声かけ笑ひかけ　同
燃え度いと思ふ氣もある未亡人　同
眞劍なステップお乳がはつてくる　布施市愛論
庖丁が巧く使へてまだ独り　同
停年へ机も吾れも禿げてくる　同
妾宅の犬はフトンを脊負つてゐ　同
銀行の廣さ小金を引き出す日　岡山縣弓削平
句が冴えて來たと思ふと訃報なり　同
新しい自轉車の主やり手なり　同
説明を便乘で聞く美術館　同
袖の下返すに苦労する師走　高槻市丁路
惠まれぬ晩年の屋台店　同
助からぬ命なれども医者を換へ　同
突然に藝妓時代の名を呼ばれ　同
教へ子の方がさつきに孫を持ち　愛媛縣曉明
思ひ出を語るにふさわしい流れ　同
おそくまでおつたで祝辞言はされる　同
羽根をつく唄はつきりと川むかい　同
里の母喰へ飲め寢ろと忙しさ　熊本市室久
喰ふ爲の勤めではない横着さ　同
公僕の夢役得が去來する　同
家計簿に啄木の詩をふとしるし　同
此外に何もないかと箸をとり　石川縣陽々
接吻を待つ眼に光るライタの火　陽々
用も無い亡き子の本の捨てられず　同
地下道に住む生命の逞ましく　同
レントゲン勿体らしく胸を見る　八代市敏彦
のどまでは來たが相手が強過ぎる　同
このまゝで死ぬ氣は注射思ひきり　同
子の財布にも百円の一二枚　同
壯語して出たが議會で声もなし　今治文庫
起きて見ろ出て見ろ雪に子を起し　同
ヒゾの手であやつる独樂が生きようと　同
そろばんで牛の命がはじかれる　同
拘引の人と女將が写される　兵庫縣天平
死ぬ順が狂ふて闇の煙草賣る　同
マルクスを読む娘クリームだけはつけ　同
足を組む女女性の立場から　同
配給も闇のもまじるちぎり餅　大阪市春柳
杵の音今年もこれで大詰めか　同
本丸がくづれた様な高島田　同
北風についさそわれた串の味　同
夜の女月に恥ぢたい程に荒れ　大阪市草々
あの人も子があるだろにジヤズの中　同
据置の満期内助を打明ける　同
飛行服生命捧げた成れの果て　鳥取市日満子
貧乏の子は貧乏の子と遊び　同
飲みつ振りこゝの女中に惚れられた　同

百姓賦（三句）

夕燒へひねもす振つた鍬をおく　今治市一風
今宵又満天の星またゝけり　同
嫌な雨だが降れば休めるとも思ふ　同
影うすき人と廊下でまた出逢ひ　和歌山市宏方
肩車満足さうな父の顔　同
強情な松は落葉をせぬと云ふ　同
会計の口さ洩れたる交際費　秋田縣夕帆
米持つて宿の帳場へお辞儀する　夕帆
古着屋へ御不用品でないのなり　同
もの言ふたばかり委員にかつがれる　新居浜市默紅
出勤の雪を冷たいものと知る　同
首卷に顎を埋めて歯が痛し　同
収賄罪なんどうそぶき立候補　石川縣味平
古雜誌職場の隅でくたびれる　同
階段のどこで見つけたラブシーン　同
臨檢へ馴れ切つてゐるコンパクト　石川縣光郎
御目見得へマダムのブローチ光るだけ　同
留守番の食事あるだけ並べたて　同
薄情か知らねど矢張りいゝ女　大阪市芋作
ふるさとは薄情ばかり吝ばかり　同
量り炭舅の粥がやつと出來　同
性愛にふれず衞生講話終りぬ　字部市粗影
未亡人の生てる妾闇たばこ　同
串柿短かし未復員の家寒し　同
妻も亡く子も亡く東京の土に立つ　岡山縣柳王
待つてゐると思えばこそ還つた東京　同
正月の路を犬だけ歩いて來　同
浮浪兒に舌打ちされてフト淋し　岡山縣夜詩絵
九原則首をひねつた銀狐　同
賃上げえ親子会社で対立し　同
スリ硝子夜の女の心かも　愛媛縣曉童
すれ違ふ船の姿も秋の視野　同
ちと出すぎたもほめられる十八九　同
振附の亭主は隅で盤をかけ　兵庫縣慶一郎
つまり海はたゞ河水のはけどころ　同
配給の昆布昆布の帶をしめ　同
雨もりを家主のそろばん取合はず　長野縣柳兒
正月へまだ要求がけりつかず　同
追放にならず恩師のみすぼらし　同
立話女の犬が欠伸する　高知縣元馬

周易の着板税で引込める　元馬
サービスを想出したる雑貨店　同
幼稚園かなと思ふ程連立つた子沢山　大阪市葉栄子
越冬資金どうのとホールよくはやり　同
二人連映写中でもよく喋り　同
座席得てから話出す空模様　愛知縣吐平
革鞄名刺と紙幣がこぼれ出る　同
母親があつて嬉しい旅仕度　大阪市定美
思ひ出になります反古もなほしとき　同
上役の子が上役の眞似をする　大阪市花代子
あはれ菊ばんばのように枯れてゆき　同
大臣になりたい訳を知る疑獄　横浜市万年
自由とは南の國へ帰る鳥　同
靴下もぬがしてと彼女は云ひました　兵庫縣正司
たまさかは印紙を吳れる店もあり　同
今度目の地震にもたぬ家に住み　大阪市五郎
半分はどうでもよい氣デモの類　同
素晴らしき相手と易者云ふてくれ　大阪市良子
相手だけ見つけて置いて勤める氣　同
ペニシリンがどうのこうのと十八九　香川縣迷観子
麦の芽が出たらダンスをすると云ひ　同
通訳なしで笑ふ來賓　大阪市葉光
逆説を面白く訊く煙草の輪　同
流れ星旅にしあれば詩人めき　小松市茶佛
膝のちり叩いて座る手内職　同
手焙りへやはり女としての型　上田市騎久夫
早仕舞くにで不幸が出來たとか　同
性格が愛してゐるとは云ひきれず　鳥取縣盈之
つまらない事まで親は問合し　同
別れ來し人の浮びぬ一人居て　今治市伶人
首巻のまゝでどつかと坐り込み　同
留守番の妻の首巻借りて出る　今治市松花
年忘れ過ぎて女房に閉め出され　同
笑つてゝやり度い顔がこわ張つて　愛媛縣旭童
自我説脚せよとはひどいお寺さま　同
幹部今日越年資金の事で飲み　上田市雀穂
俯向いてこれが好いてる證拠です　同
仲人の口は給料まで触れず　廣島市葉留路
魚屋の財布鱗もついて出る　同
毒にも薬にもならず隅に居る　大阪市三郎
青空の心で闇もやつてます　同
男もすなる女社長の横流し　大阪市草右
サイン攻め下手ながらにも型に入り　同
さういつも志年会とは云へずなり　大阪市野草
織細巧緻の女心をもてあまし　同
勤労を神聖とした勤務ぶり　大阪市桃村
農村へダンス教習のジャズ流れ　同
未亡人暮しへ世間云ふとれず　鳥取市穂波子
どうしてゐるかとはみくびられ　同
心だけ清々したと金がない　名古屋市鳳石
君よ來い食うだけはある自作農　同
マスクした娘の瞳まともなり　岡山縣赤蜻蛉
女書記二号も兼ねて平和なり　同
未帰還の子を待つ家の田の廣き　佐賀縣えいを
脊に膝に子の絡つてストの父　同
愛の巣の小さな庭に鶏を飼ひ　神戸市遠耳楼
もうとうに別れましたと舞い戻り　同
遺恨十年初恋の人も逝き　岡山縣不死鳥
否應を言はせずキッスして欲しい　同
大臣を拒んで更に男あげ　新居浜市明窓
長い目で見てくれと言ひ義理を欠き　同
かげ膳の雑煮へ妻の白き指　大阪府哲水
愛し合ふ二人へマスクじやまなもの　同
誘惑に負けたい氣持の夜を歩き　今治市晴々
胸のすく説へ番茶のいゝ香り　同
悪友のいづれおとらず娘に迷ひ　大分縣表情
診療のひまな暖炉で風邪を引き　同
空白の日記は死線越えたころ　池田市登志坊
スト成らず涙で書いた声明書　同
僕も人間だからねと官吏いふ　布施市勢峰
生れたばかりの赤ん坊誉めにゆく　同
修養の初めに習字すゝめられ　西宮市鈍昧
よく聞けば毎晩卵で洗ふ娘だ　同
お互ひに疎遠は國に罪を着せ　熊本縣砂川
憤とした嫁麦踏みのすさまじく　同
二、三人一組で居るアルバイト　愛知縣勉
田螺取りを叱つて見れば隣りの子　同
横風にロングスカートためらわず　日田市独活
秋ふかく動かぬ水にあひる浮く　大阪市早百合
ミス銀座盛装意識する歩き　東京市武雄
茨の道心中の夢を画かせる　貝塚市一郎
髭をそる音も楽しく明日思ふ　大阪市惠風
七十の祖父ひやかさる写眞帳　下関市穂波
置炬燵去年の跡が一つあり　岡山縣五九童
人形が一人ころげた籾莚　岡山縣桂花
溜息を抱へ込んでる置炬燵　岡山縣半仙
通信簿母がほめてる置炬燵　岡山縣一葉
これ三毛よ少しおきろと置炬燵　岡山縣正州
此処のとこ君研究と課長面　石川縣白夢
農事メモとにかく筆記すると決め　鳥取縣夕路
病窓え白雲悠々と流れてゐる　岡山縣梯梧
配給員慾目で分けたのを取られ　熊本縣芳醉
地下足袋が一家を支へ飯にする　大牟田市啞牛
放心の視線に蠅が二匹ゐる　佐賀縣八笑鬼
通学をサボツて焚火に交りおる　山口縣不句郎
子守歌嫌ふ子供に生れつき　岡山縣鬼灯
置炬燵春めぐり來て邪魔にされ　岡山縣益鳥

作品鑑賞 金糸銀糸

麻生路郎
武部香林
菊沢小松園
西尾栞

香林提出＝川柳塔

ゑびじやこのいのちは桝ではかられて　（豆秋）

香林＝ゑびじやこのやうな誰でも見逃がし易いものを捕えて來て、しかも生命の問題にふれてゐるのを面白く思つた

小松園＝私は最近一人の母を失つたのでこの句から受ける感じはゑびじやこの命を我々人間の命とみてそこに或る深刻なものを感じます。人一人の生命の別れに対して兄弟姉妹の涙の中に別れた命でありましたが、無関係な人達のあまりにも冷たい眼の多いのを感じます。ゑびじやこにも親もあらうし、子もあらう。この小さな桝の中にはかり込まれた幾千幾万の生命に対しての敬虔な心持を軽く句にまとめた手腕をたゝへたい。

栞＝作者独特のユーモラスな眼でゑびじやこに同情されてゐる氣持がよくうかゞへる句だと思ひます。

香林＝命を桝ではかると云ふところはユーモラスであるが笑へない嚴肅さがある。

路郎＝句意は説明するまでもない。要するに諷刺句だ。十把一からげのゑびじやこの命と十把一からげの人間の命の共通性を摑んでゐるのだ。

栞提出＝川柳塔

大道へ犬の寢相の大胆な　（無鬼）

栞＝私が提出したのはこの句が良いとか悪いとかと云ふ意味ではなく、近頃、作句上、スランプに落ちてゐる私に、何かを教へてくれてゐるやうに思へたからである。この句は「大胆な」と言ふ下五によつて生きてゐる。

香林＝犬の句は沢山あるが、その中でも、特にこの句は私の好きなものである。

小松園＝大道に犬が寢轉んでゐると云ふ見逃しやすい至極平凡なことに対してこんな一句を得られた句眼に敬服する。句意は前二者で盡きてゐると思ふ。

路郎＝これは街路での写生句で、犬の寢相の大胆さを見て作者はうらやましくなつてゐるのである。啄木は犬の歌をかなり多く詠んでゐるが、その一つに「道端に犬なが〳〵と欠伸しぬ我も眞似しぬうらやましさに」と云ふのがある。この句の作者も、世の物事に対して何かと憶病なのを思ふにつけ、この犬の大胆な寢相を見て、オヤ〳〵これでも生きて行けるのだと感心したところから、この句を生んだのであらう。写生は斯ういかなくてはいけない。

小松園提出＝川柳塔

足らなんだ頃が本当の妻だつた　（草一郎）

小松園＝過去の苦難時代を思ひ出してあの頃はあゝであつた妻、こうであつた妻と現在の生活の現況と引きくらべて其処に妻の本当のものを見出して苦難必ずしも苦ならず、むしろ赤裸々な眞心に触れてゐる小説的な過去がうかがへる句意の深さを思ひます。現在の妻に対して必ずしも不満を感じてゐるのではありますまい……。

香林＝この句は妻への感謝の情が滲み出てゐる。大平洋上の樂園であるハワイでのんびりとした生活をして居られるであらう作者の奮闘の跡もうかゞへる。

栞＝両氏の言葉で盡きてゐますが衣食足つて礼節を知ると云ふ言葉がありますが、不足勝ちの今日この句をしみ〳〵と嚙みしめて行きたいと思ひます。

路郎＝妻に対する感謝の心情を詠んだと云ふよりも、生活に余裕が出來た今日では何だか妻に対して物足りなさを感じてゐると云ふ心持を表現した句だと思ふ。同時に妻の方から云つても同じやうな氣持がはたらいてゐることを感じさせられる。俗に云ふ倦怠期に入つた夫婦の狀態を詠んだものと思ふ。

小松園提出＝川柳塔

ストせねば今にも死ぬるやうに貼り　（抱逸）

小松園＝時代色を帶びた辛辣な句、世智辛い生活時代を反映した労働運動に対して頂門の一針、雨に濡れたストのビラを思ふ。

香林＝一拳手一投足、労働價値論で料理せねば済まぬあの人々のガムシヤラな挑戰をよく皮肉つてある。

栞＝「死ぬるやうに書き」でなく貼りと省略したうまさを買ひます。

路郎＝実際ストのビラを読むと今にも殺されるやうに絶叫した文句を連らねてあるが、そのビラを貼つてゐる若い人達は四千円以上もする赤靴を履き頭髪をてか〳〵光らし、ピースを吸ふたりビールの乾杯をやつたりしてゐる事実を知つてゐるのでこの句を見て同情の念が湧くと云うよりもこの句主の皮肉な観察にむしろ興味を感ずる。

香林提出＝川柳塔

お寺にも一升びんがいる世なり　（竹莊）

血圧降下に
アークレミン
錠剤
注射
血管アウトホルモンとアミン重剤
山之内製藥

香林＝お寺に一升びんと云へば醤油かなと思ふ人は川柳家の中には居ないであろう。経済懇談会などと大きなビラを貼つておいて、懇談はそこそこに片づけ、一升びんをずらり並べる要領の良い人々の多いことを思はされる。

栞＝信教の自由から今後の寺のあり方を示唆してゐると思ふ。

小松園＝句意は明瞭、時代を歎くのみ、面白い見付所である。

路郎＝お寺がお寺の仕事で喰へないことを詠んだ句である。お寺が料理屋化してゐることを一升びんによつて表現してゐるのである。時代の産物だ。

栞提出＝近作柳樽

おとなしい妻君主権握つてた　（葉　光）

栞＝男女同権などと今更らしく騒いでゐる今日、昔から柔よく剛を制すと云ふ言葉が日本にあるのを思ひ出させて微笑ませられる。

香林＝美はしい家庭生活がよく表現出來てゐる。良き妻なり良き夫なり。

栞＝私はさうは思ひません。先程も云つた通り主権を握つてゐると思つてゐた主人が結局妻君に操縦されてゐた事を句にしたのではないでせうか

小松園＝私は行つた事はないので知りませんが映画で見るアメリカの家庭を見るやうな氣がする。こゝに絶対家庭争議は起きないでせう。時代の尖端を行く葉光氏の炯眼を称へたい。要は栞氏と同じ見方である。

路郎＝「主権を握つてた」と云ふ意味はおとなしい妻君だと思つてゐたが、いつの間にか金庫の鍵を握つてゐたと云う意味である。この句の裏には経済的に自由のきかぬ腑甲斐なさを感じてゐる夫の姿が目に浮んで來る句である。

香林＝成る程さう云ふことですね。

小松園提出＝近作柳樽

This is a pen を聞いてゐる　（揚　甫）

もらひ風呂

小松園＝近所の風呂をもらひに來た女学生が、ついでに習つたばかりの今日の英語を尋ねてゐる風景、横文字を入れた一寸新しい型に見えるだけの句、句意は浅い様に思はれる。只それだけの句。

栞＝私は作者が風呂をもらひに來て其処の息子が習つたばかりの英語の復習の声が聞こえて來る狀景を想像する。もらひ風呂では昔から面白い句が沢山ありますが、この句はもらひ風呂として遠慮してゐるところもなく、のう〳〵ともらひ風呂してゐる風景が変つた形式と相まつて面白く思ひます。

香林＝作者の意志は想像出來ないが、もらひ風呂をして、眞面目に勉強してゐる声を氣持よく聞いてゐるのではなからうか。平凡な句であるが風呂の中で自分の子もこの様に勉強してくれたらなあ等と思つてゐるのではなからうか。この際何を勉強してゐてもよいのだが英語の勉強をしてゐる児童の声に時代色を摑もうとしたやうにも思へる。

路郎＝写生句として成功してゐる。諸君が、この句を読んでうけとつた句意が少しづゝ食ひ違つてゐるが、この句は風呂をもらひに行つて湯槽の中に浸つてゐると突然大きな声で初等英語の勉強を、その家の子供が始めたのである。そして風呂の中で自分もあんな時代があつた事を懐想して興味を感じてゐる所を詠んだのである。近頃のもらひ風呂の一風景である。

小松園＝普通の場合に貰ひ風呂で、そうゆつくり其処の子の勉強の声を聞いてゐる程余裕があるか如何が、私には女の子が多いので女の子が英語の初等をそつと聞いてゐる情景と見た。要は私の家庭から想像したのである。

路郎＝小松園君の女学生云々は少し考へ過ぎでこれは男の子見るべきである。それから今日習つて來た英語を貰ひ風呂のついでに訊きに來たと解しられたが、それは解釈が全然間違つてゐる。若し質問に來たのだとすれば「聞いてゐる」の「聞く」は「訊いてゐる」でなくてはいけない。子供は云ふまでもなく風呂のある家の子供である。（終）

口窓

選と私（二）

麻生路郎

私の選が厳選だと云うことは私も認めるが、私は好んで厳選してゐるのではない。誰でも自分の作つた句が、片すぐれた句だとは思つてゐない筈である。この言葉が正しいとすれば、その中で、特にその作家の箇性の出た句でしかも優秀な句を抜くことは選者の責任ではないかと思ふ。

或る人から、選をするのに一定の水準があるのかと訊かれたが、たしかに、それはあると思ふ。しかしその水準は絶対的ではない。

例へば、不朽洞會の作家達の句を選する場合に比較的年数の浅い作家や精進の足りない作家の句は一定の水準から少々レベルを下げて選をしておくが、豆秋などの句になると水準を下ゞる位なら没にしてしまう。豆秋の句はいゝ悪いは別として、十句が十句とも川柳になつてゐるのである。それを川柳になつてゐるからと云つて、アッサリ十句採るのでは指導性はない。それ等の十句から、彼が今、何を目指して進んでゐるかと云うことを先づ親なければならないのである。そして、その線に沿うて、彼の句をよりよく活かすやうに選をしなければ、選者に指導性がないと云うそしりを甘受しなければならないであらう。試みに彼の最近の句を検討して見給へ。彼が意識してゐるかゐないかは疑問であるが、「早よ帰りなはれや誕生日だつさかい」「間違ふて掏りなや金のない財布」などの句に見るやうに、日常語をふんだんに駆使して句に生命を吹込まうとしてゐる。この点を見逃して彼の句を選する資格はない。尤も斯うした作風は彼にして能うことで、誰もが眞似して成功するものではない。なるほど日常語を用語とすることは出來やうが、單に日常語を使つたからと云つて彼と同じ境地の句が生れると云う訳のものではない。彼の句には彼の性格と日常語とが巧くマッチしてゐることを見逃してはいけない。殊に、「間違ふて掏りなや」の嘲の如きは彼の句を生かした天來の妙音だと言へやう。しかし彼の斯うした句風の中にも尾脊を歩いて突風のあほりを食うやうな危険が潜んでゐることを知らなければならない。

私はさきに、比較的年数の浅い作家には選句の水準を低めることがあると云つたが、これは作家の欲をを求めたためではない。その行き過ぎを選句によつて救はうとしたのである。そのため日の浅い作家には精進の外には何物もなついかからである。拔けた句と掴沒にもなつた句の相違をシッカリと掴むことである。そこに日の浅い作家にとつての進歩がある。

川柳塔共鳴

富士野　鞍馬

十二月号の「川柳塔」を拜読して、共鳴した句に何か一寸云はしてもらひました。お笑ひ草にでもなれば幸甚。

説教の受け賣りをする　四十過ぎ　香林

私は四十才の時二十一才の一人娘を亡ひました。そしてそのショックから何かと人様に説教じみたことをいふようになりました。それを人様がきいてくれるのをうれしがつて益々説教を勉強しました。又自分で実践するようになりました。今の私は「五十而知天命」を越えてゐます。亡き娘の生命は私につながつて居ります。ありがたいことであります。

天ぷらは家でなかつたのかと靴をぬぎ　孤浪

事務所から夕刻の帰り途で、各家々から夕げの仕度のいゝ匂ひの色々がもれてきて、あるく私の鼻を喜ばします。家では何をこさへてゐるかしらと楽しみに足を運びます。その日の配給の匂ひは道々かいできたのですが、そのうちでも天ぷらの匂ひはうれしい匂ひであります。電車から鰻屋の匂ひをかいで走るのもいゝものであります。

金もろた方へ政治はころぶなり　豆秋

先年木炭一俵で一票といふ話を路郎先生からきゝました。藝者も金もろた方へころびます。政治は藝者みたいなもんでせうか。近頃何とかギゴクとかいつて大きな話をきゝます。これからはそれでないようにしたいものです。默つてゝも路郎先生を國会議員に選挙するといふ時勢にしたいです。

百姓の眞似してトマトみな枯らし　湖山

お隣がトマトを植えました。みんな虫がついて枯れました。次に大根も全部葉がシンだけになりました。お隣は植えた丈であと何の世話もしなかつたようでした。そのお隣りでは何でもよく出來てゐましたので害虫がみなお隣の畑へやつてきたのでした。然しお隣は百姓の眞似もしてゐなかつたのでした

多數決明治生れが口惜がり　半休

新日本になつてまだ旧日本式でゐてはいけないのであります。私には西洋音樂はわかりません。芝居は見ますが映画は見ません。けれども常に若い人に同調することにつとめてゐます。死に近いものと、遠い者との思想の差は永久に仕方ないでせう。口惜しがらない方がよろしい。アタリマエのことです。

停電を又内閣のせいにする　醉月

停電で私の宅では家内が眼鏡を踏んでこわしました。新調したら千五百円かゝりました。土地の各工場では停電による損害賠償を訴へるといつてゐます。電産労組に賠償の能力はないでせう。やつぱりこれも政府のセイでせうか。

稲妻の下に故郷の山がみきを　あり

稲妻を眺めてゐると面白いものです。ピカッと光つた瞬間に照らされた部分がハッキリして、廣重の絵のそれのように空にひらめく美しさ、宅の孫共もいつもキレイだ〳〵と手を叩いてゐます。そして雷の音に眼をふさいで次のイナヅマを待つてゐます。然し私には故郷の山があまりに遠いのです。

ボクは赤ん坊である

山根白星

「吾輩」なんぞと言ふと漱石のオジチャンの剽窃になるし、そも〳〵猫族と万物の霊長たる――いやその事はよそう――それに今ではそんな言葉はオプソリートだから、アブレ・ゲールのボクはやつぱりボクといふことにしよう。

アダムとイヴとのエデンの園の話は知らないし、「神よ、あなたは私の恥部です」なんて椎名のオジチャンはフロイド流のオブセニティで全くけしからんと思ふけれど、ボクだつてキャベツの中なんぞから生れてきたのでない位は知つてゐる。母胎に於ける單細胞動物が驚くべき幾何級数的な分裂生殖作用に依つて――オツトいけない誰やらさんのエピゴオネンになつちまふ。――いつも世間のプロフキルをソラの様に視てるボクは本当に眼を蔽ひたくなることばかり。でも涙が出る程感激しちやふこともなくはない。げんに、

おれに似よ俺に似るなと子をおもひ　路郎

此の句を見る度に涙線が痙攣してお父さんつて有難いなとしみ〴〵思ふ。

ひしと抱き寄せるものの子のほかになし　丹路

ボクだけでは不満だと言ふ心情がり〳〵と見へて、少しボク感情を害したので、OGYA、OGYA（ボクの拒絶と軽蔑の意志表示）つてオジチャンの頭と言はず顔と言はず手で突つ張り、足で蹴りまくつたのだけどボクの意志が通じたか知らん。でも、

そも〳〵の嘘の始めのゴム乳豆　丹路

で、すつかりオジチャンが好きになつちやつた。やつぱりオジチャンは話せるな。お母さんの、含水炭素の不足からだつたらベーツスがあつて我慢出來ぬこともないけど、だまそうなんて言語道断だと思ふ。そも〳〵社会悪の濫腸はと言へば――丹路オジチャンと同感!!

社會黨か君も西尾の亞流だね　路郎

握らせりや握る社黨のあさましさ　同

社会党のオジチャンばかりではない、昭電関係のオジチャン達果ては平沢のオジチャン、みんなボクだつた時には大いにゴム乳豆党だつたのだと帰納的決論する事が出來ると思ふ。これらの大人達を動かしてるのは、袖の下とか鼻薬とか言つて、お金の累積だそうで、宗教は阿片かどうかは知らぬが、こいつは阿片に相違ない。ものすごくチャーミングで、エクスタシーになるらしいけど、ボク喫つたことないからよくは知らない。

金もろた方に政治はころぶなり　豆秋

一本の花を赤ちやんむしりとり　錦風

か。嗚呼。それにくらべるとボクの、おいたくらい、なんだと言ひたいな。

金なんぞと笑へば若いせいにされ　白星

ざまあみろつだ。白星ニイチャン何も知らないくせに、へんな所で笑つたりするから馬鹿にされちまうのだ。ボクのことおませだの生意氣だのつて言ふからさ。も少し世間つてものを勉強してゐらつし

麻生路郎著　水武書房版

最新刊

川柳を研究したい人にも指導する人にも好適の書

本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から説き起して敢むるところ三十七講、平明で親切で、初心者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出來る。多年川柳してゐる人たちにとつても又好参考書である。敢て一読を薦む。

B6版　二一二頁　定價一〇〇円　送費金三〇円

取次御注文は　大阪市住吉區万代西五丁目二五番地　振替口座大阪七五〇五〇　川柳雑誌社

やい。イイーだ。世間には、まだ〳〵酒と女と煙草つて三つのデイモンがからくりの糸を操つてゐるそうだ。酒。

二三杯呑めばうれしき夜の街　鮎美

ぐらいだつたらいゝのだけど、最近クローズアップされたカストリゲンチヤのだらしなさつたらない。

箸にも棒にもかゝらない帰り　方正

近くは泉山のオジチヤンが、いゝサンプルさ。困りますれ全く。困ると言へば　煙草。

もう一人の自分喫殻拾ひかけ　玲之介

紳士のオジチヤンがおかしいな。

お月様煙草巻いてゝおかしかろ　白柳子

おかしくはないけど、お氣の毒みたい。モノポリー・ビューローー（路郎先生に随つてモノトリーの方が適切かも知れない）にかけ合つてレディ・メードのやつを配給してお貰いなさいな。これでは身を持ち崩したなど余り聞かないからいゝ様なもの、女。これには困るくらいではすまない。鼻の形がもう少しよくなかつたら歴史が変つてゐたらうつて言ふ程だもの。それにしてもオール・マイテイの神が創造に当つて両性を対立させたといふ事が解せませんれ。エロースつてものから出來るジエリーに、ソースかけた様なちぐはぐな味のする「恋」といふものだそうだが不可解なもんですなあ。「川柳雑誌」にでも、この系統の句が一番多い様だけどそれから推しても仲々デリケートなものらしい。

理性といふ冷いものにブツつかり　翠光

繋断の木の実みたいに敬遠してゐるオジチヤンがしほらしくなつて、矢つ張り理性つて近代が生んだ悪徳ですれと同情したんだけど。

火の様な唇だつた星あかり　翠光

ですつて、全くオジチヤンには失礼しちやふな。一通のレターの遅延があのハムレットとオフエリヤの悲劇を巻き起したり、ロミオとジユリエット、アルマンとマルグリット――到底言ひ得ないけど、こんな華花一朝の夢に過ぎない、嘘と嘘との大人の世界には、全くもう眼を蔽ひたくなるばかり。だから、いつまでもいつまでも、ボクは今のボクでありたいと思ふしアブリオリの、この純心さをいつまでも抱いてゐたい氣持で一杯。にくまれ口ばかり叩いたりして、深い思索のないボクの無智のおしやべりをきつと非難なさると思ふけれども年はもゆかない奴の事だと思召して勘忍して下さいなうんそう〳〵ボクキリストに叱られたつてやつぱり、マリヤのオバチヤンよりマルタのオバチヤンの方が好いや。

（一九四八・十二・二〇）

文字のいたずら

作田夏波

同権の嵐も我々男子をして驚かせた事は本当である。今更驚くわけではないが岩戸神樂の始めより女ならでは夜の明けぬ國の日本を何時のまにか男尊女卑の世にしてしまつた。終戦後より同権々々と騒ぎながら私の近辺にも迫りつゝある一昨年の選挙には女の立候補も馬鹿にはびこつたが今年は矢張り男に一役をゆずつて居る。たゞ同権は女性の礼儀道徳をめちや〳〵にしたに過ぎない。然し私の提唱する文字と数字の配列から男尊女卑なる事実を裏付ける。

「先づ四海波静かに云々」と謡ひ終めた人生の出発点から観察すると女を嫁（四め）男を婿（六こ）といふ。正に四対六の比で男は二級上なるは事実。次に「お前百まで儂九十九まで共に白髪の生えるまで」と民謡にも妻の長生を祝つて居るが、夫に死に別れた女を後家（五け）と言ひ妻に死別した男を鰥（八もめ）と言ふ。正に五対八の比で三段へ飛躍した。男よ、同権もヒステリー女の寝言に過ぎないではないか。

男だつて前垂れに手をふくさ　（久留美）

同権になつても母の座りどこ　（三星子）

同権だ言ひたいことは言ひなさい　（路郎）

上役

月原宵明選

上役は浪曲がすき　将棋好き　梅風
上役も家では薪を割つており　揚甫
上役が叱られに行く社長室　葉光
上役の辭を給仕がまず見つけ　聽松
米二升また上役に頼まれる　日灣子
上役の近所に住んで使はれる　茶佛
組合の決議に上役小さくゐる　きはち
上役の煙草マツチとライター点く　草々
上役は背中でばかりものを聽き　万年
上役がそつと呑んでるアルバジル　元馬
上役の机は街が見おろせる　定美
上役もやつぱり手巻吸つてゐる　独活
上役のかぼちやが垣を越して來た　迷親子
上役のお歳なか〳〵よう当てず　蕣花
判やたら押して上役今日も暮れ　晴晴
上役がゐるので電話親しめず　わたる
下つ端は何も知るまい風をして　曉明
上役が起つと三味線調子替え　芋作

課題吟

上役へ夜蔭ひそかにお菓子箱　喜由
上役が後ろで帰る夜の道　弓削平
上役のさすがに錆びた声と節　沒食子
上役の眼鏡に寒いストのビラ　甦光
次の間に呼んで上役叱つてくれ　浪二
謹厳な課長がみせる隠し藝　武雄
上役がチラと写つたコンパクト　哲水
上役と旅の土産を買ひに出る　北路
上役に及ぶ事なり默つとき　沒食子
上役の口程もない温か味　喜由
上役のまだ抜け切らぬ國訛り　錦風
タイプ打つ間上役窓へ立ち　K子
上役の默念と居て怖がられ　柳堂
五・蔭口へ社長のベルが鳴り響き　茶佛
五・上役を訪へば日曜釘を打ち　鮎美
五・くたびれた服で課長椅子につき　晴晴
五・募金箱上役と來て同じ額　小楼
五・上役の髭があられをのせて來る　K子
人・停電のそれから上役こわくなし　鮎美
地・上役へ学理あえなしへこまされ　秋男
天・ひと事の例で上役諌められ　喜由
軸・上役へ去年百円貸したまゝ

にきびとり美顔水
桃谷順天館

いのちある句を創れ

柳壇

投稿清規　▼用紙は原稿用紙▼文字を正確▲開催月日及場所記入▼締切毎月廿五日▼投稿先本社宛

忘年川柳會（本社）

十二月十二日十三時
於　一　運　寺

今の日本で、賑やかな忘年句会を持つことだけでも、お互川柳家にとつては大きなよろこびだと思ふ。段々珍らしい顔が殖えることも愉快である。

出席者＝路郎・文蝶・默平・蝸牛・万楽・案山子・更生・香林・潮花・花代子・鳩花・定美・良子・兎子・静一路・緑雨・美奈子・雅美・翠光・生々庵・鮎美・里十九・野介・種美・東雀・愛論・春草・瓜平・水客・万的・青丹子・紫香・葉平・茂勝・銀羅漢・美水・すすむ・茂・六文・正則・さよ子・律子・正司・小松園・沒食子・三郎・斜水・亞鈍・錦風・修三・星登・正和・史葉・籌彦・栞・葭乃・梨里・一歩

兼題「無心」　麻生路郎選

ゼニ貸せの話へ時計長く打ち　野介
それで足るのかと一枚余計遣る　默平
髭置いてカバンを提げて來る無心　潮花
妹へしがない無心する師走　春草
借金に歩きつかれて暮れの街　兎子
闇からの椽で経済無心に來　抱逸
無心する親爺はあれでアルバイト　正司
[illegible]しだれ程の[illegible]縁　愛論
[illegible]・[illegible]へ[illegible]めと無心それつきり　逸名
無心狀となれば名文かく男　茂
返事ない無心へこんど妻が行き　正則

百万円貸せと堂々たる無心　葉平
若旦那軸持つて來て無心なり　種美
無心したあとは氣まずい事になり　普天
無心とは予感で知つた十二月　籌彦
碁敵が來てゐて無心云ひそびれ　香林
開業の祝ひ無心を聞いてやり　同
落籍されてポチ〳〵無心の兄が來る　栞
無心なら断りなさい電話口　春草
無心云ひ〳〵ほうづきを鳴らし　鮎美
戸締りを云うて無心は帰るなり　水客
御無心へ今日は女の方が來る　万的
又無心東京で彼奴何しとる　東雀
無心又誰か病氣にしてしまひ　紫香
借るウソを貸さないウソがなぐさめる　翠光
美しい顔して抜目なうせびり　同
無心狀今は立派な実業家　香林
呑み過ぎたことは書かない無心狀　同
破れ傘さして無心と間違はれ　正則
闇会社秘書は無心をさばく役　春風
電車賃使うて無心ことわられ　更生
丸窓に写る無心は新派めき　鮎美
いやですと無心あつさり断られ　静一路
角帽で無心に來てる應接間　花代子
旧友へ無心にいつた事をくひ　鳩花
無心先づ虫の居処さぐるなり　正則
潮[illegible]を図る苦心の無心振り　六文
又しても競馬に捨てる無心なり　種美
無心などいへる年なり若うゐる　定美
解散も近し無心を聞いてやり　正司
無心言ふ事も心得派手に住み　良子
読むほどにだん〳〵無心狀になり　小松園
半分も言はさず友は入れて呉れ　雅美
うなづいて無心同情されただけ　修三
暮の無心言われる方もふるえてゐ　雅美
アロハシャツの無心をはねたい、度胸　正司
たのんでる方の身になつて貸してやり　里十九
達筆をよく〳〵読めば無心狀　芋作
無心してほしいあの娘がよりつかず　茂
無心狀長さに誠意見せて來る　小松園
一足遅かつたと無心断はられ　斜水
恐ろしや三人連の無心なり　里十九
無心言ふつもり煙草を吸ひつくし　小楼
ことわられそうで無心は吃り出し　葉光
女房は無心の金と知らず買ひ　雅美
落ついた無心奥まであがり込み　花代子
無心される高を心で決めて合ひ　星登
煙草の無心は默つて手を出した　路郎

兼題「胸」　水谷鮎美選

胸の辺ヂツト見つめて見合すみ　籌彦
香水が胸から匂うドレスつけ　野介
胸を病む子のハモニカへ白い月　万的
浮浪兒の胸にもいたし故郷の灯　沒食子
年頃の胸囲となつた作業服　亞鈍
おほらかな胸に抱かれてみたくなる　修三
満員車胸のフラワがかわいさう　花代子
それない恋を小さな胸に描き　茂
借衣裳胸をはつても大きすぎ　翠光
眞実が胸に響いた星あかり　香林
御佛の様な乙女の胸飾り　牛休
自我自尊おくめんもなく胸をほり　亞鈍
青春の夢は褪せたり胸ほそる　東雀
我が胸の冬のひざしのまぶしくて　紫香
港の灯男の胸へ泣きくづれ　静一路
心行くまで愛人の胸で泣き　春柳
馥郁と胸ゆたかなる裸婦の像　鶴声
胸迄を湯槽につかつて嬉しそう　柳慶
胸にもたれた女の髪をなでゝやり　普天
胸病むに母は山羊飼ひ鶏を飼ひ　抱逸
胸中を二号眞面目に聞いてくれ　兎子
胸像をほる藝術で髪がのび　葉光
亡父に似て胸毛ゆたかにやさしい作　定美
誓ひまだ胸のどこかでとどめられ　銀羅漢
又明日になると胸算狂ふなり　水客
陽だまりにほろ〳〵温き母の胸　瓜平
それぞれに訴へてくる小さい胸　潮花
胸の灯はそつと消さずにおきませう　青丹子
すべり台まつすぐ母の胸に來る　小楼
思ひ出を胸にいだけば雪の山　水客
無口たべ胸のボタンをかけ直し　沒食子
薄情が胸にこたへた夜のしじま　鮎美
愛人の胸のあたいをこそばかし　同
テンポラリそれ若人の胸に問へ

兼題「アイロン」　市場沒食子選

アイロンの序にズボンたのまれる　万楽
継はぎの服だがアイロンあてゝゐる　史葉
洗濯屋アイロン掛ては水を吹き　静一郎
ヒューズが飛んでアイロンあわてたり　柳慶
着る事もあるでアイロン当てさきな　良子
新家庭らしくアイロン光つてい　小楼
こわされたまゝでしまつてゐるアイロン　定美
アイロンの先きで手毬をはね返し　瓜平
無器用なやつだがアイロンだけはあて　史葉
のご自慢聞いてアイロンかける妻　春草
もう帰る頃へアイロン暇が出る　翠光
一同の寸志アイロン贈つて來　抱逸
アイロンでしがなき老の賃仕事　種美
男手のさてアイロンがまゝならず　小楼
アイロンも器用にかけて独り者　柳慶
アイロンに少女のちさき勤めあり　葉光
お隣りが寝てからアイロン使ふなり　牛休
故障したアイロン棚に上げた来、　更生
アイロンは子の耳打を笑つとき　水客
アイロンをかけて大学出がしやべり　鮎美
停電をしたアイロンのまゝで待ち　定美
アイロンも全快近き話しぶり　万楽
アイロンへひとり松風聞いている　水客
アイロンの加減は指で試される　斜水
アイロンへメートル少し氣にしてる　定美
何事も云はずアイロン当てゝゐる　芋作
三世帯住んでゐるろん一つあり　錦風
アイロンを持つても思案まだつかず　里十九
アイロンをかけて優しく着せてやり　花代子
アイロンも当てていゝ値で借りてゐる　良子
アイロンをかけさせといて髭をそり　紫香
アイロンへよくもこれだけ継のあり　良子
アイロンで薄謝の紙幣をピンとさせ　生々庵
アイロンも要らぬ生活へ子が殖へる　銀羅漢
起さぬけにアイロンが要るい・話　水客
泣き声へフトアイロンの手が止まり　斜水
アイロンへ小春日和つ冬つゞく　默平
アイロンの下にズボンは湯氣を立て　文蝶
アイロンをせき立てゝゐる日間表　翠光
一寸寝てなはれどアイロンかけて呉れ　文蝶

アイロンへすねてる様にシヤツののり　愛論
アイロンを掛けた敷布にしみがあり　種美
特價品だけにアイロンすぐ出たみ　星登
トランスが焼けてアイロン慌てやう　野介
痛癪の娘にアイロンの手荒すぎ　案山子
アイロンは序序を引受ける　默平
アイロンを置いて予報をじつとまも　紫香
ヒヨツトコの様にアイロン霧を吹き　斜水
アイロンのまだ温もりのカラーで出る　万樂
アイロンの折り目も若く稀の祝ひ　潮花
アイロンの愚痴軽労の加配米　沒食子

席題「欠席」　竹内潮花選

欠席を案じて行けば二日酔　方正
欠席も出來ず幹事の席にいる　三郎
欠席をする罰金をせしめて來　万樂
けたゝまし電話欠席つげて來る　鳩花
愛人の欠席ひとり淋しくゐる　定美
欠席のまゝで昇給辞令來る　小松園
欠席の理由買出しとは云へず　美奈子
欠席の人の噂さで座が白け　青丹子
欠席を報告されるよい身分　斜水
欠席の復信出して旅へ出る　沒食子
株主総会へ女社長は出て來ない　水客
欠席をしても代議士金になり　茂
欠席をした兒を訪へば晝をぬき　香林

席題「十二月」　黒川紫香選

人情の薄さを知つた十二月　翠光
十二月の道を清掃労働者　銀羅漢
十二月の道を清掃労働者　正則
パンクしたまゝで自轉車十二月　史葉
金策に襟立てゝ出る十二月　鮎美
改札でとがめられてる十二月　潮花
父親の儲けで足らぬ十二月　万的
前賣りの列に師走の風が吹く　沒食子
十二月つき合ひ倒れしそうなり　水客
十二月鉛筆の要る用ができ　錦風
ついうそを言つてしまつた十二月　良子
かけ取も易者へ寄つてる十二月　里十九
なんぞぼろい事ねまんやろか十二月　鳩花
共嫁ぎ茶づけさら〳〵十二月　正則
リンタクの値を聞いて見る十二月　

十二月フト番犬に疑われ　香林
盗難はひとごとでなし十二月　万樂
十二月なにやら下駄で踏みつける　潮花
十二月度胸定めたよい日和　種美
十二月やつぱり映画見てるなり　里十九
猫の子を貰ひ十二月暮れる　鮎美
鳩時計がだしぬけに鳴る十二月　水客
起きぬけに電話がなるも十二月　万的
自轉車で寄る丈けにする十二月　紫香

席題「ボーナス」　互選

ボーナスをもらうたとたん集めに來　紫香
ボーナスの帰り讓渡品賣場　小松園
ボーナスはせめてワイフに封のまゝ　愛論
ボーナスの何れは足らぬ封を切り　默平
ボーナスをたのむ子の慾妻の慾　翠光
ボーナスへ一寸不満の女秘書　春草
当にするなと云ひつゝボーナス等にする　正司
ボーナスが出て終電車にて帰り　良子
計画はボーナスはるか上廻り　すゝむ
ボーナスは心斎橋で迷ひかけ　里十九
ボーナスは心斎橋から消えてゆき　案山子
ボーナスをとりに会計自動車で　正司
ボーナスがよつぽどうらい会社なり　種美
ボーナスの袋はでかいのを使ひ　潮花
ボーナスに子供の夢をこわすまい　青丹子
ボーナスを渡して課長出かける氣　紫香
ボーナスで佛壇を買ふ不倖　茂
ボーナスの予定がくるい餅をへし　すゝむ
ボーナスを受取る妻の手のぬくゐ　春柳
ボーナスは動くおもちやを買つただけ　万樂
ボーナスを兩手で受けた子沢山　鮎美
ボーナスを妻と子供に使はれる　蝸牛
ボーナスを貰つた顔の戎橋　免子
何日出しよるのかボーナス待つてゐる　葉平

角力吟最優勝

不足言ひ言ひ二十年経ち　葉平

雑川　**阿倍野支部句會**（大阪）

十二月十八日　於　王子神社

酔どれ・輪タク・黒焼・河童・鬼

酔どれに社長が意見されてゐる　三郎
酔どれの瞼に浮ぶ兒の笑顔　靜
酔どれの度胸は電車に飛びつい　籌彦
酔どれに柱のきずが氣にいらず　水客
酔どれの調子はづれに唄ひ出し　竹莊
酔どれが駅長室で寝てしまい　豆秋
改札へ來て酔どれはよくしやべり　紫香
酔どれにうまを合はしてバスを待ち　沒食子
酔どれの眼に流れ星駆られ　鮎美
酔どれを寝かしてさつと霜に更け　角嵐
酔どれが橋筋廣ふ狭ふ拔け　愛論
酔どれの大臣無茶な税をかけ　種美
酔どれをひきづり上げて終電車　同
玉山崩れず侶律やゝ廻りかれ　野介
介抱をする氣の方も千鳥足　同
酔どれの眼に睨まれて座をゆづり　亜鈍
酔どれが何んやらポケツト捜してる　同
酔どれて見たい夜もあり小市民　德三
酔どれと知つてかフンと夜の女　同
酔どれへ犬ほへかゝりほへかゝり　里十九
酔どれをなぐさめていろい巡査　同
リンタクの背の汗すまぬ乗心地　千峰
公金を持つ輪タクのホロ深く　角嵐
仲の好い二人を輪タク背中で見　文蝶
アベツクも氣にせずリンタクよく稼ぎ　愛論
輪タクに何やら花が掉してあり　野介
酔ふてゐる客へリンタク逆らはず　紫香
輪タクが坂のところで尻を上げ　亜鈍
輪タクでまつすぐ嫁の家へ着き　水客
輪タクで買う果物は値を云はず　同
輪タクが一服してる中の島　竹莊
輪タクの恋は難波で降りまつさ　同
輪タクが色街までの汗をかき　豆秋
輪タクの降りてやるかと思ふ坂　同
輪タクで來た父米をどさり置き　鮎美
終電のあと輪タクの五六台　同
参道に繁昌してる黒焼屋　種美
黒焼を案じて飲ます母若き　愛論
黒焼のさわればくづれそうに見え　豆秋
利きそうな色で黒焼並べられ　水客
黒焼のいわれをきけば嬉しそう　竹莊
黒焼がきかないと云ふ斗病院　紫香
黒焼にすればと蛇ものむつもり　沒食子
黒焼屋店うす暗く年増がゐ　鮎美
ホーラクに染む黒焼の断末魔　角嵐
黒焼に癒る意慾をまだすてず　德三
名も云はず良く効きますと黒焼屋　里十九
黒焼は婆のまゝの猿の首　同
物凄い河童出そうな沼の色　愛論
河童へソ出して遠いかみなり　勢峰
発電所のモーターになれ河童寝る　德三
月の出へ河童うつかり皿を見せ　文蝶
船宿で河童の話きかされる　竹莊
冬の水河童の恋にうごくなり　水客
月白くしろく河童も岸に立ち　紫香
河童同志道頓堀へ來てもまひ　里十九
月の路ちつくりてつくり河童來る　野介
河童二三人風呂屋で叱つとき　亜鈍
にんげんの影へ河童の化けられず　鮎美
生涯を鬼と云はれて金をため　種美
鬼検事丹当にする茶を貰ひ　水客
ある日鬼ひたいの角を淋しがり　野介
鬼曰く舌拔も騰り鉄棒も又騰り　里十九
文学の鬼に喰はれて自殺した　亜鈍
幕切れへ正面を切る鬼となり　紫香
大臣の舌倦が拔く〳〵　豆秋
鬼寂として金棒をだいちがり　鮎美

雑川　**篠山支部句會**（兵庫縣）

十二月十八日

ひげ・師走

その髭で二十六とわマアイヤダ　吸流

阪田謄寫版

大阪市北区芝田町二五

阪田商會　株式会社

電話　顧島一六三九番

次会は髭を議長にしてしまひ　吸流
チョボ髭の課長氣輕に着任し　尋四
冷かされ冷かされ鮪髭でゐる　無鬼
喰ひ兼れてゐる口髭のフト淋し　同
見比べて髯から先にお茶を出し　壽花
雑炊が髯の先にも一すつき　壽
床狀のバロメーターといふ鬚ののび　一二
師走にはなんとかなると又逃げる　壽
値上りの師走がこわい身分なり　吸流
師走師走こんな赤字を如何にせむ　無鬼

川雑　**大牟田支部句會**（大牟田市）

十一月　高田抱逸報

鼻風邪・古本・足袋・辻・妙令・夢・マッチ

ハナカゼの子（それ林檎やれ蜜柑　常夫
お見舞ひはハナカゼですと延しき　一葉
非常線巡査ハナカゼひいただけ　抱逸
ハナカゼへ妻は夜勤が氣にかゝり　平人
ハナカゼで妻の言葉も色氣がち　彌永
出戻りの次女にまかして古本屋　抱一
古本の囲碁の定石又古し　文情
古本を見つけ追放を決議する　寄史
毎朝の足袋を捜すも子沢山　抱逸
母の情継足袋からも匂つて來　土山
眞新らし熱氣にやむ足袋の裏　文情
地下足袋が一家を支へ飯にする　啞牛
継のある足袋も恥ぢない年となり　一葉
バスを待つ辻は忙しい顔ばかり　平人
やみ買ひはいつもの辻をぬけてゆき　一葉
空つ風辻姫無駄に喫ひつゞけ　抱一
恥しい話は妙令背できゝ　一葉
恋愛は夢判断もやつてみる　寄史
生活の夢給料は上らない　つれ夫
A給の昔はみんな夢となり　文情
五六本すつてマッチはやつとつき　啞牛

十二月廿日　於　三染食堂

富田一葉報

贈物・火の用心・紳士・平凡・無心・元旦

贈物たしかに効いた娘の素振り　土山
階級の相違一級酒が屆き　抱逸
贈物大臣覚の名で受ける　寄史
裏せつけて妻用心の水をかけ　抱逸
マッチ置く位置家中のいゝ躾け　薫風
安物を買つて紳士も世帯ぢみ　一葉
紳士的態度に恋が捗らず　星人
孝行を賞めて紳士は花を買ひ　抱逸
平凡な妻はまだ〳〵産むつもり　星人
平凡な伜で母の御氣にいり　亀水
御無心はビース一本だけですみ　星人
それからの縁でアンチヤン無心に來　抱逸
元旦へ足袋を捜すも子沢山　同

川柳雑誌布哇支部　**ウイロー社**

一月十六日　於　ヌウアヌ温泉

晴

大空は容易に晴れぬ西東　泉水
共学して優等賞に晴れた顔　長洲
ウツブンの晴れそうもない日が続き　快夢鬼
俄雨晴れて銀バス光るなり　友三
晴の式とかく二人でまゞゆがり　自然生
惨劇へ関りもなく青い空　晩翠
霧も晴れてハイキング　流水
行き行きて丘は晴れるも道遠し　夢相兒
罪晴れて民主の風が冷たすぎ　山石
晴渡る空へ釣れよと釣れまいと　利々葉
晴れやかな顔が見送るよい天氣　野渉
疑を晴らす術なし袖をかみ　亭駒
罪晴れて出れば冷い風が吹き　草一郎
いとし子の晴着に香る母の愛　曉舟
晴姿見せ度い親はすでになし　友郎
晴れて添ふ影にいとしい母の愛　夢樂子
長い目で見よ皇國に晴はある　笑有
大初日晴れてゆるがぬ富士を見る　潮風
元旦は先づ晴と書く日記帳　河舟
氣晴らしに座敷に出ると妓は云ひぬ　魔花麗
還暦へ集ひ來る子へ山も晴れ　柳村
晴れてよし雨降つてよし差向ひ　一郎
晴れた夜の星の傳説（ハナシ）を子供等に　沙兆

川雑　**竹原支部句會**（廣島縣）

一月十三日　於　可笑居

柳慶報

巡査・選挙・屏風

清貧の巡査女房と氣が合はず　芳郎
口紅もつけずミスボリ厳と立ち　柳慶
子供等へ巡査は恐い人でなく　愛鳩
それからの巡査裏から來るのなり　可笑
酔ざめの水を巡査がくんでやり　芳泉
総選挙哀れな程の声となり　柳慶
同権へ女なか〳〵あなどれず　可笑
候補者の名も知らないで孫の守　愛鳩
一票を台所から覗みに來　芳泉
なぐり書きした当選御祝　同
角かくし重たく屏風にゆれてゐる　柳慶
恩給の余生屏風も破れ果て　芳郎
久々の宿の屏風をなつかしみ　可笑
おらが春写して貰ふ金屏風　芳泉
屏風からそつと出て來る産見舞　同
仮祝言となりの屏風借りて來る　愛鳩

日の丸句會（鳥取）

十二月十日　於　鳥取支社工場内

十二月・雲・雪の朝

柿一つ寒々となる十二月　民雄
朝の雲雪となること信じきり　滋路
窓からの雲父のこと母のこと　日濤子
霽れて來た月雲を抜け雲を抜け　穂波子
生くる幸信じて詣る雪の朝　盈之
霊峯の賀狀舞込む雪の朝　民雄
パラックにむかえた今年雪の朝　貴美女
この年も幸あれかしと雪の朝　秋男
足跡をひろつて歩く雪の朝　滋路
元旦の雪大股で出社する　日濤子
朝の雪降つたまんまの神代めき　穂波子

DONの夕（大阪）

十一月廿五日　於　ドン

秋風

秋風に今年も一俵たのんどこ　里十九
秋風の駅の女は家出めき　栞
秋風が十九の心諦めつける　幽王
秋風に釣場をかへたが帰るとき　角堂
秋風にふところまでも見られだり　水車

十二月二十五日　於　ドン

雪・河豚

聞き合せ鼻のあたまで雪がとけ　鮎美
雪降れば降るで又又飲むはなし　里十九
雪ちらり〳〵なまこはいらんかな　豆秋
抱つこして雪やコンコを見てゐます　同
夜の雪踏むな〳〵と炬燵から　貴志子
雪掻きにマダム指図の懐手　同
雪らしい朝寝の首をすつこめる　同
足踏で外套の雪を拂ふ子ら　角堂
どの辺で雪に逢はか汽車の屋根　幽王
雪景色女は小足で歩くもの　同
愁ひなど捨てろと雪が降つてゐる　勢峰
大雪のかき舟ポツと灯をともし　栞
牡丹雪つぼめる傘は新派めき　同
シグナルは青ししん〳〵はたん雪　文蝶
田も畑も雪々々を勤めに出　清潮
しつかりと遺骨を抱けば雪となり　花代子
ふぐ鍋は誘つた方が毒眛する　水車
河豚食はぬ男と橋の上で別れ　栞
ふぐ喰べて來たのを妻にかくしき　幽王
大皿小皿ふぐのつくりのうつくしき　鮎美
河豚釣つてそれから何もつれず去に　同
取まきへ河豚の効能一くさり　貴志子
鮎酒の話になつて膝くずし　角堂
黒枠の葉書ふぐだと書いてなし　同
ふぐばかり釣れて短氣になつてくる　豆秋
ふぐの眼がどんより見てる冬の空　角堂
留守番はふぐで一杯やるつもり　水客
ふぐ鍋に情婦めきたる妻の膝　德三
河豚だけのビクへ港は晴れて來　湖花
食はずぎらい河豚へ弱氣の友を呑み　文蝶
先生の娘が河豚料理たべたがり　古方
てつちりへあんたまかせの箸を割り　夕鐘

白鷺川柳會（姫路）

大阪の柳人を迎へて　於料亭　蔦

十一月二十三日　狩野燕子報

旅・愛情・展望・白鷺城雜吟

山の宿旅愁と云ふを感じ初め　樹甫
とんれるを二つくぐれば旅の空　燕子
旅の雨一合ほどの酒に酔ひ潮花
一人旅心にもなく若返り一笑
一人旅月のしろさを振りかへり紫香
愛情が國の境を越えてくる　揚甫
愛すればこそと会計に叱られた　樹甫
愛情のはしくれ下駄を買うてくる　一笑
乳を吸ふ子へ愛情をみな取られ　清潮
形見まで置いて出た子に親は病み　凡水
ひとり娘を人形のやうに可愛がり　樹甫
行きすぎた愛情は死をおそれない　花代子
愛情の中でき[illegible]ひな死を急ぎ　紫香
愛情一路賣喰ひのまだつゞき　一笑
愛情の値踏されてるのがくやし　潮花
あゝ家島びつくりする程近く見え　凡水
展望を見下すまでの汗をかき　定美
見下せば勝手のちがふ町に見え　樹美
天守閣仰ぐ中に立つ我が家　和水
見下せば本建築が立ち並び　燕子
眼下には復興進む城下町　凡夫
展望は汽車ののろさを見ていたり　一笑
展望の中に播但線下り　揚甫
見晴しは遠くの景色から教へ　紫香
大天守紅葉はひくく眺められ　燕子
お菊井戸のぞけば何か落ちる音　紫香
お菊井戸古城と共に名が殘り　二葉
学校の声して天守畫になり　樹甫
お菊井戸落葉をこぼす井戸になり　紫香
定美

川柳不朽洞會

指導　洞友

麻生路郎　鳥山一歩
沖野岩三郎
贊助
池澤樂居　亀井晨修
長谷川一徹　田村孝之介
笠原路生　高尾尭雄
高嶋米峰　山本雨迷
長野晴濱　安川久留美
藤村一作　山路閑古
前田伍健
浅田柴谷宰二郎
末弘嚴太郎　姪子省二
中田守雄　西島〇丸
白川朋吉　麻生葭乃
中村祐吉　橋本緑雨
高安六郎　高鷲亜鈍
藤村雅光　澤田四郎作
田中辰二

不朽洞會員

—特別會員—

中島生々庵　藤井友郎
奥村丹路　内藤草一郎
武部香林　高田抱邊
戸倉普天　三輪晩翠
藤岡至藝　水谷鮎美
井上湧三　村松夢裡
小川靜觀堂　大坂形水
岩崎松代　村田流水
上田翠光　小田沙兆
須崎豆秋
宮田不二
米本貴志子
大西八歩

—維持會員—

福田山雨楼　永田里十九
寺井鋭々　高田抱邊
高澤一浪　石浦柳水
石井白面人　清水白柳子
戸田古方　稲葉鳩花
丹波斗士　鈴木九坡
木村孤浪　小坂慈雨來
前山北海　夷一笑
古川魔花麗
岩崎山石

—正會員—

市場沒食子　菊澤小松園
吉田水車　岡崎祥月
須崎豆秋　弘津柳慶
石曾根民郎　吉田圭井堂
中西おさむ　糸本醉月
西垣錦風　多田一波
福田妄夢　大塚一球
岡村路三　富岡淡舟
山根梟人　石原伯峯
川村好郎　山野星登
濱田久米雄　吉村靜一路
黒川紫香　藤田わたる
北川春巣　竹内潮花　中島鐵洲　木下幽王　手島一舟　山根白星　近藤亜仁　阿万万的　間島青丹子
布施鎮川　山分北路　藤田天風　東田晩鳥　飯降白香　福島正則
竹内潮花　井村寒浪　小川恒明　佐野卜古　月原宵明
鈴木石鹿　増田耕民　國弘半休
杉谷湖山　白牛奇朗
鈴木九坡　小坂慈雨來
夷一笑
早川聽松
山野星登
石原伯峯
富岡淡舟
藤田わたる
吉村靜一路
風郎
東田晩鳥
飯降白香
福島正則
丹波斗士　木村孤浪　前山北海　築山快夢起　古川魔花麗　岩崎山石
西尾栗　山東路城
櫻川不水　好崎申仙
尾崎方正　關根山彦
布施鎮川
橋本美奈子
尾崎方正
櫻川不水
好崎申仙
水谷琴水　小橋隆如
水谷竹莊
尾崎緑之助
新川博也　中島鐵洲　下山清潮　鈴木みきを　山根白星　間島青丹子
大森風來子　小西無鬼　八竹正柳　小澤史葉　大西野介　中内翠芳
河野甲東　大鶴喜由　村上角堂　岡島嶺泉　吉田斜水　在間小楼　科埜種美　龜山晴峯　西辻竹青
中西おさむ　久連松春月　蒲田鈍太　紺屋島無人　竹田芦穂　林野甦光　長野井蛙
土井文蝶　南鼓扇　種瓜平　篠山壽彦　渡邊孫拙　小田垣蝸牛　上田春柳　山林正思

ステート・フエア

全國川柳大會

豫告

☆日時　五月八日　午前十時入場

☆會場　近鐵沿線　あやめ池遊園地

朝日新聞社創立七十周年記念として增産に勵む吾等が春の祭典、日本ステート・フエア大展觀が、あやめ池十五万坪の地域で開催されるので全國川柳大会を場内の野外劇場で開くことになつた。詳細次号。

主催　川柳雜誌社

後援　朝日新聞社

——と僕は思ふ

この一文を編輯後記に代へる

世界がリンク・バイ・リンクで出來上つてゐることを知らぬ人が多い。人間の生活がリンク・バイ・リンクで成立してゐることを知らぬ人が多い。政治屋は政治屋の世界しか知らない。闇屋は闇屋の世界しかしらない。靴みがきは靴みがきの世界しか知らない。平和が戸惑ひするのも無理はない。文化がベツをかくのも尤な話だ——と僕は思ふ。

民自の吉田茂氏をガンコ親爺の標本のやうに新聞が書く。ガンコならガンコでもいゝ、徹底して欲しい。大新聞や大雜誌の小説が、女のお尻を捻で廻はしたり、バクチの解説をしたり、姦通の仕方の手ほどきをしたり、ラヂオで淫賣の買ひ方を教へたりしてゐるのはあまり見つともいゝ自由主義とも云へまい。アーアーだ。俺はアタマが陳いのかな。——と僕は思ふ。

死にます〳〵と云うヒスの女はなか〳〵死なない。今にも餓死するやうに絶叫してゐる勞働組合の人たちはトンと餓死しない。今日は死にに行きますとも云はずに帝銀の人たちは死んで行つた。平沢は闇家かと思つたら小説家でもあつた。明けても暮れても文化々々と云つてゐるオレたちを世間ではチンドン屋だと思つてゐるかも知れない——と僕は思ふ。

もういゝ加減に寒たらどうだとマドロスパイプが叫ぶ。視神経も大ていではないだらうと六〇ワットの電球がなげく。

丁度はらんせもし半出たら、わしを賣らんせ吉原へ

君たちはこんな民謡を知つてるかい。吉田総理にこの意氣ありや。

見送りましよとて
涙まで出たが
泣けて
「さらば」が
云へなんだ

これはどうだ。片瀬の片山哲氏にこれを贈らう。さらば社会党よ。——と僕は思ふ。（深夜のベッドにて路郎生）

——動靜——

▼本社新春句会は一月九日十三時から一運寺で開催▼川雜北大阪支部創立句会が一月十五日十三時から神津の蓮正寺で開催された▼大阪逓信病院新年川柳会は一月二十日十四時から三階図書室で開催▼南海電鉄川柳会は一月二十六日十六時から開催、以上何れも路郎主幹出席▼扶柔金属川柳会は一月十三日十六時から開催▼川雜ハワイ支部は一月十六日ヌウアヌ温泉で新年句会を開催▼川雜篠山支部は一月八日新春句会を開いた▼白鷺川柳会は一月三日樹甫居で開催された▼川雜備前支部句会は一月二十日久米雄居で開かれた▼川雜久賀支部は一月十八日路三居で開催▼楊半山氏（高松市）は終戦後に亡くなられたとのこと、氏は中華民國が清國と称した頃に來日された清國人で、最後高松高商に奉職されてゐた変り種の川柳人だつた▼長野文庫氏が川柳句集「つるし柿」を一月一日に刊行された。苦労人らしい句が随所に見られる。穿ちの巧い作家である。この句集には世相がハツキリ出てゐて面白い▼小畑自由朗氏は兵庫縣美嚢郡北谷村富岡へ疎居▼松盛琴人氏は東京都新宿区戸塚町三ノ八七四へ移居▼荒木哲水氏は一月十五日兵庫縣武庫郡鳴尾村明和病院五八号室に入院された。同じ病舎に元不朽洞会員の田辺由布氏が入院されてゐる由▼越智伽藍氏は長崎縣厳原町中村五八〇へ移轉された。

募集

課題吟募集

見送り（十句）國弘半休選（四月五日締切）

高利貸（十句）須崎豆秋選（五月五日締切）

毎号募集（毎月五日締切）

近作柳樽（雜詠廿句）麻生路郎選

川柳塔（雜詠）麻生路郎選

文章（評論・研究・感想其他）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▼『近作柳樽』は一般作家の雜吟を募る。

▼『川柳塔』への投句は不朽洞會員に限る。

日本ステート・フェア大展覧
STATE FAIR
朝日新聞創刊七十周年記念
増産に勵む我等が春の祭典
4月1日→5月31日
2月25日より 割引券割引入場券發賣開始 ¥60.
☆特等 ノースウエスト機に依るアメリカ旅行招待一週間
又は現金50万円 （但し自由渡航が許可になつた場合）
其他 嫁入道具・牛・現金5万円・豚・映畫スター参加旅行（2日間）等 12,200名
前賣券發賣所 各新聞販賣店・近鉄線各驛・大阪市内百貨店・プレイガイド其他
於 近鉄沿線 主催 朝日新聞社
あやめ池遊園地

趣味と教養の殿堂
松坂文化クラブ
會員募集
松坂屋
大阪日本橋 電南一一七一番
課目
雅道（小原流・未生流）
茶道（表千家流・宗圓流・裏千家流）
洋裁・書道・日本舞踊
箏曲・聲樂
手藝・古典・新舞踊
長唄・小唄・謠曲
服飾デザイン
詳細お問合せは七階文化クラブ事務所へ

清談・商談・お待合せに
茶喫 みどり
上六交叉点西北角

B列5号 毎月一回一日発行
川柳雜誌 第四卷 第二号
一冊 金二〇円（送料二円）
（載轉禁）
半ケ年概算 金一三二円
一ケ年概算 金二六四円
昭和廿四年二月廿五日印刷
昭和廿四年三月一日発行
大阪市住吉區万代西五丁目二五番地
編輯兼印刷人 麻生幸二郎
大阪市住吉區万代西五丁目二五番地
発行所 川柳雜誌社
振替口座 大阪 七五〇五〇